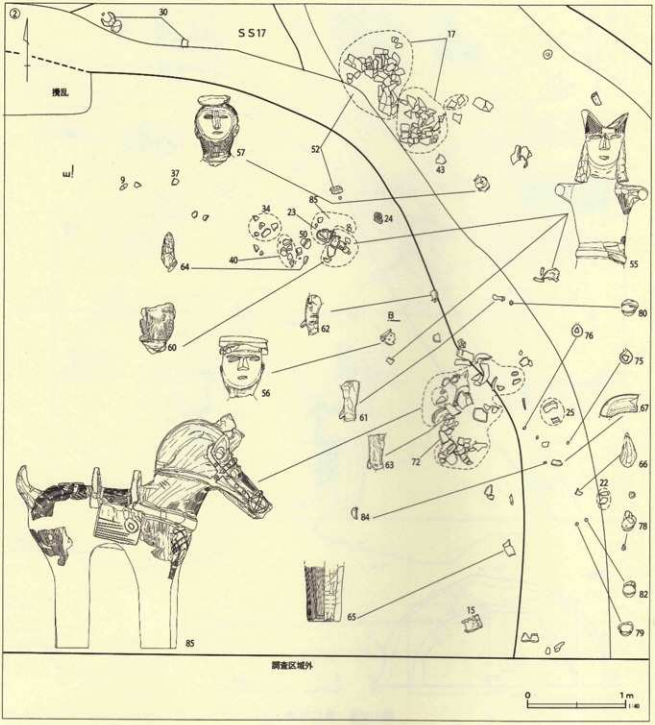
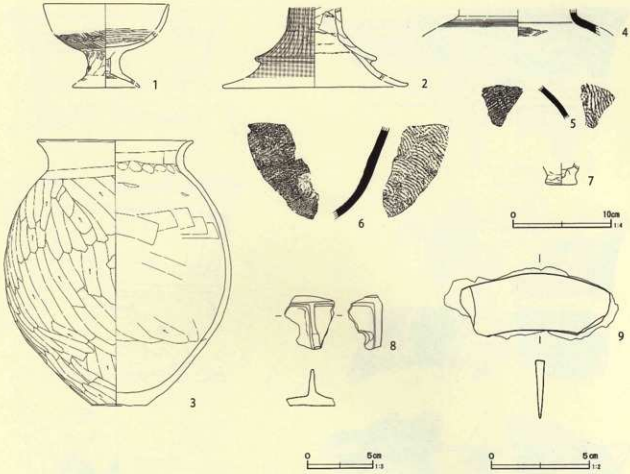


第514図　第17号墳（4）

はN－29°－Eを示す。プリッジの開口方向は他の古墳が北西方向を指すものが多いのに対し、唯一、北東方向を指していることから、本墳と第16号墳の間を南北に延びる墓道（幹道）が存在していた可能性を示唆する。

周溝覆土は大きく13層に区分される。周溝各所の土層の堆積状況は一様でないが、下層に暗灰色、黄褐色、暗黄灰色、灰褐色の粘土が周溝底面を被覆するように堆積し、中層には黄灰褐色、暗灰褐色の土層が、上層には灰褐色、黄灰褐色の土層が堆積する。概ね自然堆積であろう。

遺物は、墳丘部及び周溝から万遍なく出土している。とりわけ円筒埴輪や形象埴輪の中には、ある程度原位置を反映した状態で出土したものが含



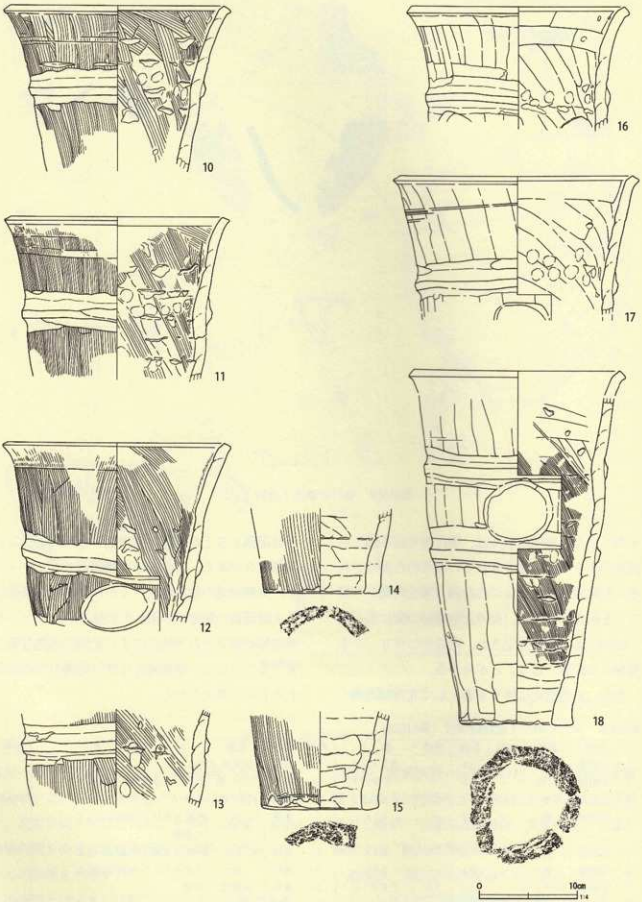
第515図　第17号墳出土遺物（1）

まれていた。埴輪の多くは、墳丘裾を巡る幅1m前後のテラス面に樹立されていたものと推定される。形象埴輪はブリッジの左側（墳丘外側から見て）を起点にして男、女の人物埴輪の後に馬が続く配列であったと想定され、明らかにブリッジを意識した配置であることが分かる。

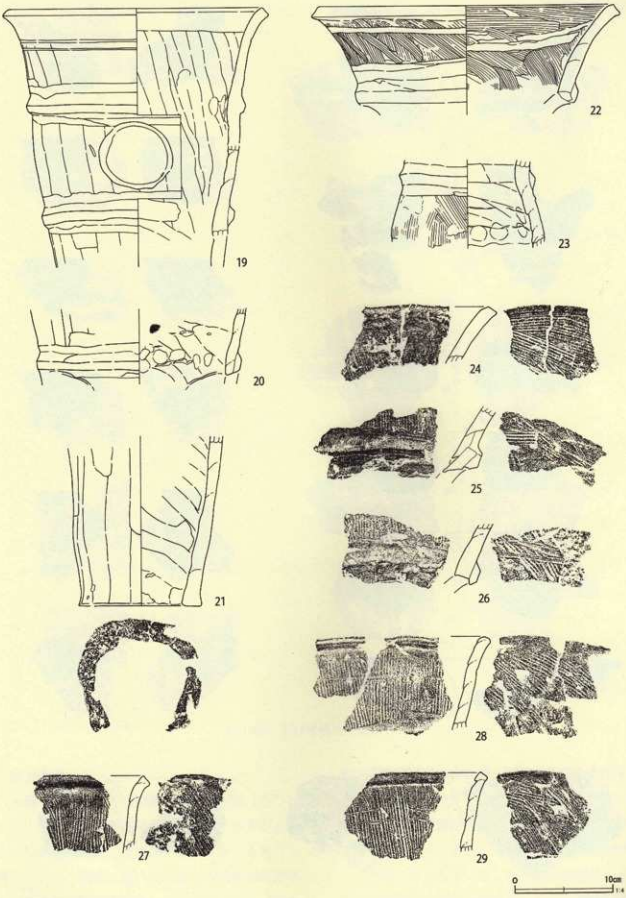
また、古墳祭祀に伴う土器として北西側周溝の外縁部側立ち上がり際から出土したほぼ完形の土師器甕3がある。この他に実測図示できなかったが、東側周溝の墳丘側立ち上がり際の周溝底面から土師器壺の胴部片が潰れた状態で出土した。人物埴輪が樹立された地点のすぐ北側の周溝内部にあたることから、埋葬儀礼に伴い周溝内で破砕されたものと考えられる。

第188表　第17号墳出土遺物観察表（第515図）

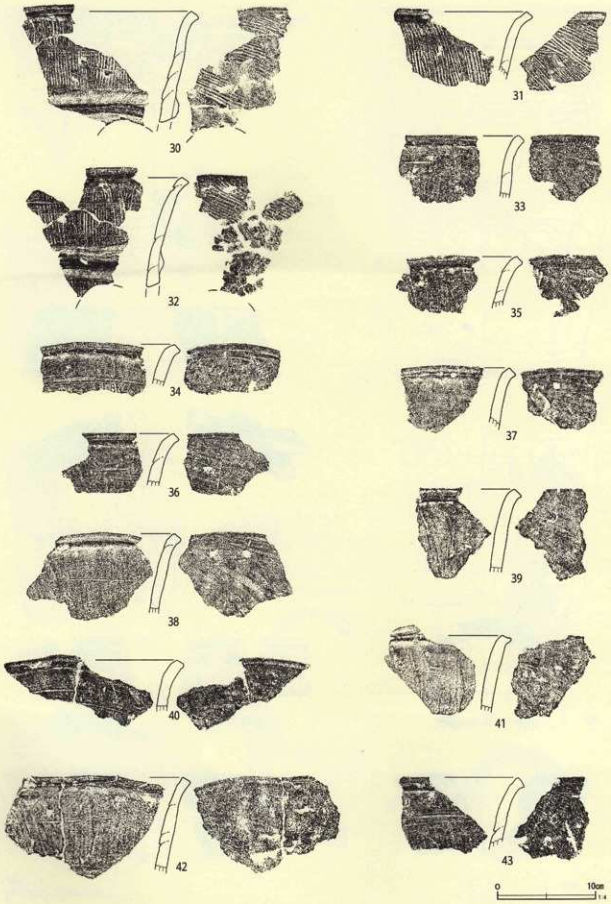
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	残存	焼成	色調	備　　考	図版
1	土師器	高坏	—	5.4	—	ACHIK	70	普通	灰黄褐	№2	
2	土師器	高坏	—	7.4	—	CEHIJK	95	普通	にぶい橙	赤彩　有段脚高坏　№73	
3	土師器	甕	15.7	27.0	5.7	CEGHI	90	普通	にぶい橙	№78	179-1
4	須恵器	甕	—	2.6	—	EIK	5	普通	灰	外面カキ目　内面同心円文 在地産	
5	須恵器	甕	—	3.5	—	EIK	5	良好	灰	外面カキ目　内面同心円文	
6	須恵器	甕	—	9.4	—	EIK	5	良好	灰	外面カキ目　内面同心円文	
7	土師器	ミニチュア	—	2.2	3.2	CEHIK	70	普通	灰黄褐	周溝	
8	土製品	瓦塔	長さ4.0	幅3.7		HIJ	破片	普通	淡褐		178-10
9	鉄製品	鎌	長さ8.9	幅2.9	厚さ0.4	重さ49.46				№34	179-2



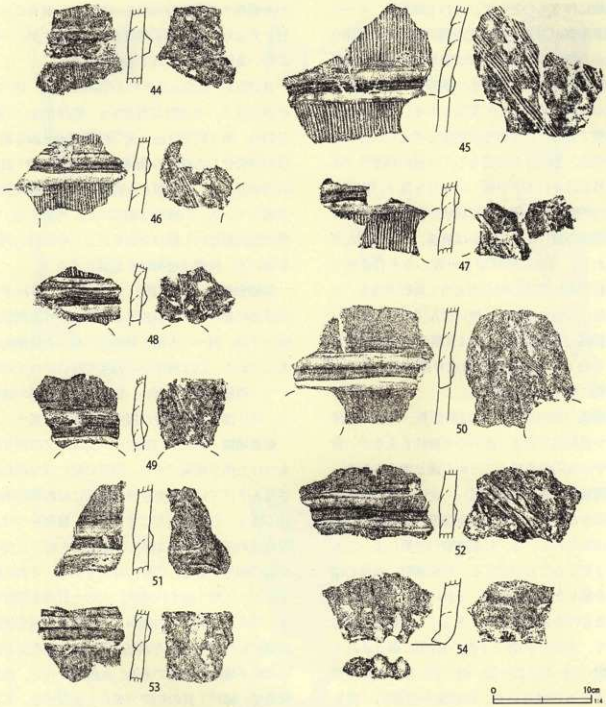
第516図　第17号墳出土遺物（2）



第517図　第17号墳出土遺物（3）



第518図　第17号墳出土遺物（4）



第519図　第17号墳出土遺物（5）

出土遺物

土器（第515図）　古墳に直接伴わないものとして1・2の土師器高坏、7のミニチュアがある。1は短脚の高坏で、坏部は半球状を呈するものと考えられる。脚部は短い柱状部と内湾指向の裾部からなる。坏部は内外面とも丁寧にヘラミガキを施す。2は有段脚高坏の脚部で、外面に赤彩を施す。二重口縁風の作りで、明瞭な段部を作出する。外面は縦位のヘラナデ、内面は横位のヘラナデを施す。北西側周溝の底面から出土した。7はコップ形を呈するミニチュアである。底部は器肉が厚く、平底に作られている。各土器の時期は、1・7は古墳時代前期の五領式期、2は古墳時代中期の和泉式期後半に位置づけられる。

古墳に伴うものとして、3の土師器甕、4～6の須恵器甕がある。3は北西側周溝の外縁部側立ち上がり際から出土したほぼ完形の土師器甕である。胴部中位に最大径をもつ胴張甕で、口縁部は頸部から大きく外反して立ち上がる。4～6は須恵器甕である。いずれも在地産と考えられる。4は中型品と想定される甕もしくは壺の頸部片である。外面は平行叩き目後、カキ目を施す。内面は木目の明瞭な同心円文当て具痕が残る。5・6は甕の胴部の破片である。5は肩部、6は底部と考えられる。外面は平行叩き目後、カキ目を施す。内面は青海波文状の同心円文当て具痕が残る。6は外面が火色に変色し、焼け歪んでいる。

土製品（第515図）　8は瓦塔の軸部の破片と考えられる。斗栱表現の持送り部分であろうか。土師質に焼き上がっている。

鉄製品（第515図）　9は断面長三角形の刃部をもつ鉄製品である。直刀の可能性もあるが、背が緩やかな円弧を描くことから鎌と考えられる。

円筒埴輪（第516～519図）　全体の形の分かる個体は少ないが、すべて2条突帯3段構成品によって占められている。外面調整の差異によって大きく2分することができる。外面調整に通常の縦ハケを施したものをA類。それに対し、板ナデを施したものをB類とする。さらに、B類は法量によって、大型のB1類と小型のB2類に細分される。

A類（10～15、27～32、44～48）は、全体の形の分かるものはないが、口縁部が直線的に開き、口径23.1～23.4cm、底径11.8～12.0cm、器高32cm前後に復元される。口縁部は端面を作り出し、幅広くヨコナデを施す。突帯は低台形もしくは低M字形を呈する。透孔は円形を主体としている。外面調整は縦ハケ、内面調整はナデを施した後、口縁部から中間段まで斜ハケを施し、粘土紐痕を明瞭に残す。底部は基部幅3.0～5.0cmを測る。色調は赤褐色を基調とする。

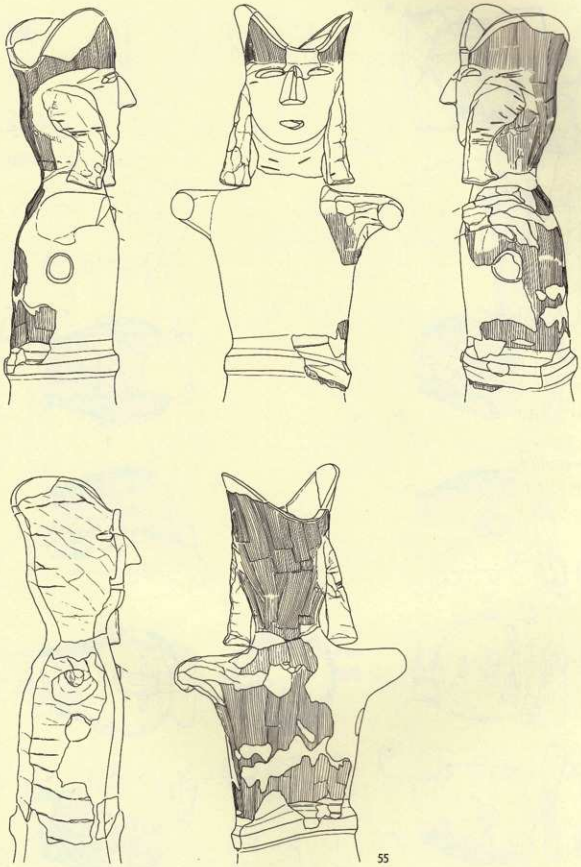
B類（16～21、33～43、49～54）は、外面調整が所謂板ナデ調整のものを一括した。通有のハケ目と異なり、条線が不明瞭なものを指すが、一部に弱い条線の認められるものもある。

B1類は口径25cm以上の大型品で、17・19・20が該当する。B2類は口径23cm、底径12cm、口縁長10cm、第2段長9cm、最下段長17cmを測る最下段の伸長化した細身の個体である。16・18・21が該当する。B1・B2類とも法量以外の特徴は概ね共通している。口縁部は端部で短く外折する。突帯は低台形ないし低M字形を呈し、中間段に円孔を開ける。色調は橙褐色を基調とする。

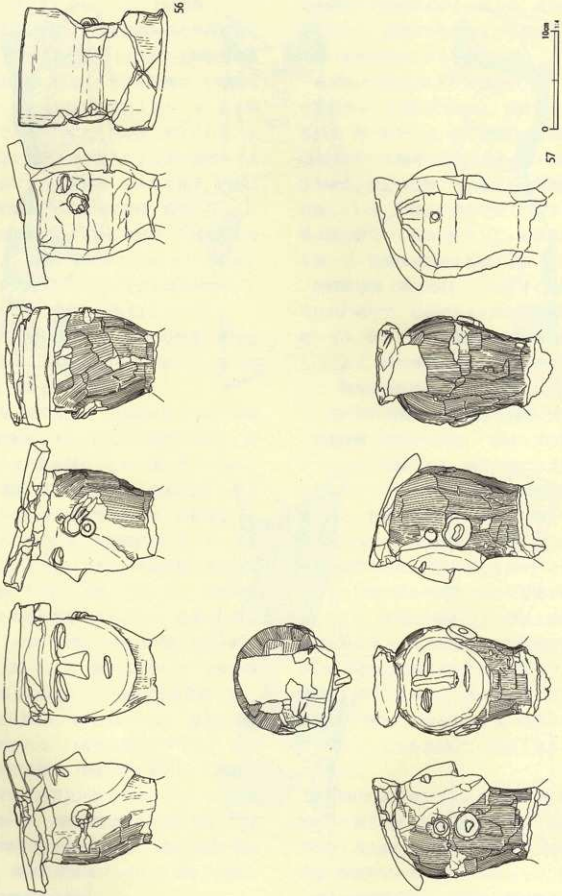
朝顔形埴輪（第517図）　22は大きく外反する花状部の破片で、口径31.6cmを測る。外面調整は縦ハケ後、斜ハケを粗く連続的に施した特徴的なものである。23は肩部から頸部突帯にかけての破片で、肩部の張りは弱い。24～26は花状部の破片で、花状部の突帯部分に擬口縁を明瞭に残す。

形象埴輪（第520～526図）　55は二又の被り物をつけた男子埴輪である。両耳の脇には立派な美豆良を下げている。美豆良の外面には板押圧痕が良く残る。右腕を前方に差し出し、腰帯をつける。現存高約39.5cm。56は板状の撥形髷を結った女子埴輪の頭部である。円形の耳孔を開け、それに接するように粘土紐を円環状に丸めた耳環を貼付する。さらに、耳孔の内側から3本の粘土紐を後頭部側に貼付する。現存高15.7cm。57は台形髷を結った女子埴輪の頭部である。丸顔の作りで、鼻は鷲鼻で、棒状工具の刺突で鼻孔を表現する。耳孔の下には円環状の耳環を貼付する。頸部には粘土粒を貼付して丸玉を表現していたようである。現存高18.0cm。

58は棒状の美豆良と考えられる破片で、外面に縦位の沈線を施す。59は頸飾りである。粘土紐の上に粘土粒を貼付し、丸玉を表現する。60は人物埴輪の胴部片である。接点はなかったが、55と同一個体の可能性が高く、腰帯の一部が残る。61～64は人物埴輪の腕部の破片で、いずれも木芯中空

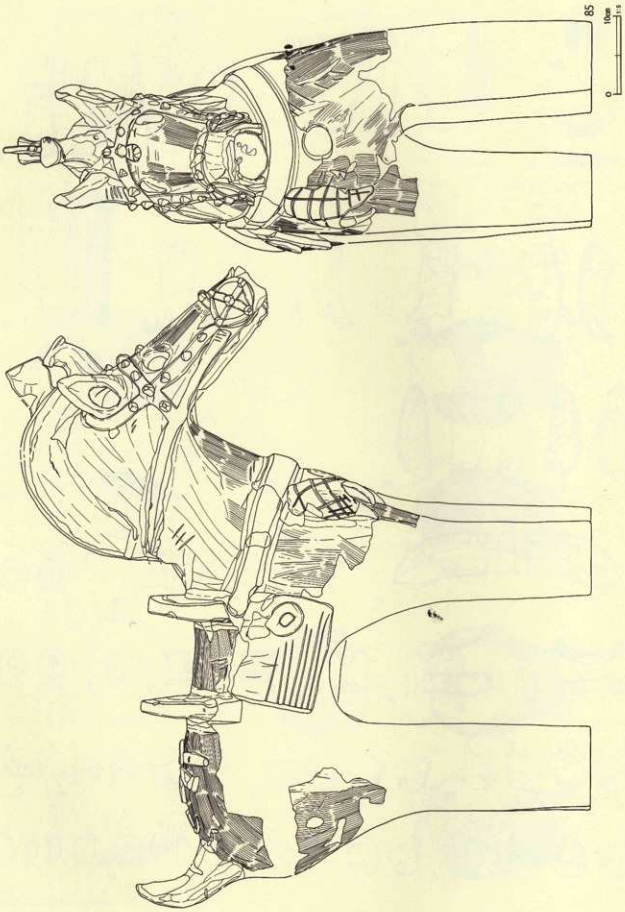


第520図　第17号墳出土遺物（6）

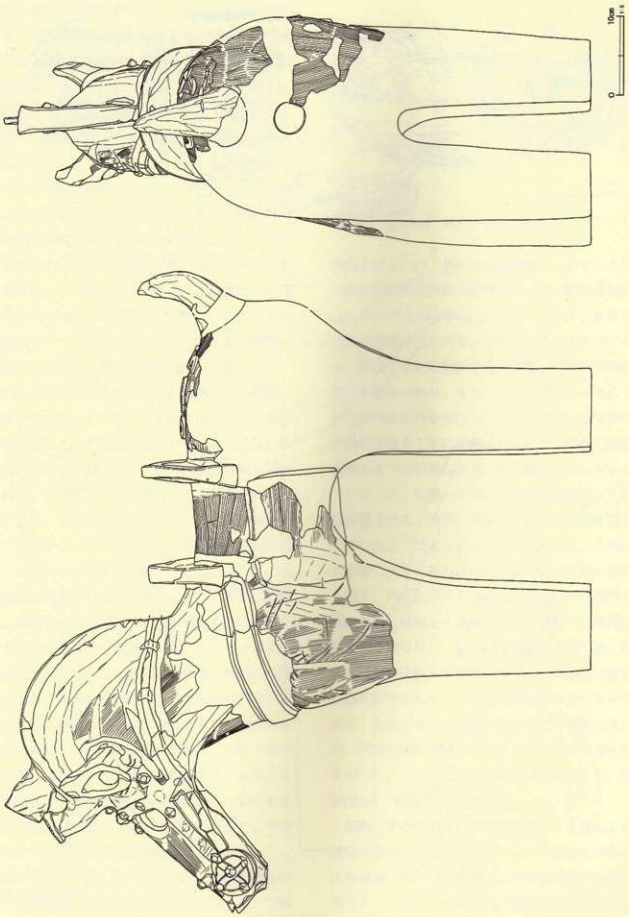


第521図　第17号墳出土遺物（7）

第522図　第17号墳出土遺物（8）



第523図　第17号墳出土遺物（9）

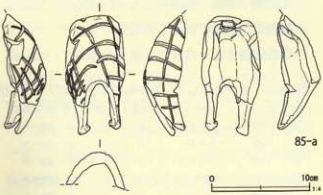


第524図　第17号墳出土遺物（10）

技法によって成形されている。61は左手の破片である。湾曲気味に延び、拇指と手の甲の内側に4本の粘土紐を貼り付けて五指を表現する。外面には板押圧による平坦面が顕著である。62・63も左手の破片で、腕部に板押圧痕が顕著に残る。64は腕の付け根の破片で、先端を絞って尖らせ、肩部に挿入し易くしている。

65は馬の脚部の破片である。切開再接合技法によって成形されている。66は短く上方に跳ね上がった尻尾の破片である。粘土紐成形によって中空に作られている。67は鞍の前輪の破片で、ナデを丁寧に施し、硬質に焼き上がる。68は馬の耳の付け根部分と考えられる円孔の開いた破片である。69は緩やかに屈曲した紐状の破片である。外面に板押圧痕を残す。馬形埴輪の尻尾の下側に回した尻繋の一部であろうか。70・71は緩やかに湾曲した薄い粘土紐の上に粘土粒を貼り付け、その頂部を板押圧によって平坦に成形している。さらに平坦面には赤彩が施される。馬の面繋の飾りと考えられる。72は扁平な棒状の破片で、端部がやや幅広になる。外面には赤彩を施す。73は薄い板状片で、端部がコハゼ状を呈する。外面に赤彩痕が残る。74～76は粘土紐を水滴形に丸めたもので、馬形埴輪の尻繋等の飾りと考えられる。外面は平坦で、板押圧によって本体に貼り付けられていた。77も同様に粘土紐を水滴形に丸めたものであるが、他よりも一回り大きく作られており、輪鐙の可能性がある。外面は板押圧により平坦面を作る。78～82は馬形埴輪に装着された鈴である。粘土塊を丸めて直径3.5cm前後の球形に成形した後、横方向に切り込みを入れて鈴口を表現する。基部には馬本体にナデつけた痕跡が残る。83・84は直径3.5×3.0cm、高さ1.3cmほどの半球形を呈する中空の破片である。馬形埴輪の飾金具であろう。

85は脚部を欠損しているほかは、比較的残りの良い馬形埴輪である。頭部はほぼ完存する。円筒閉塞側板式の頭部で、目を丸く開け、瞼を僅かに



第526図　第17号墳出土遺物（12）

隆起させる。口、鼻孔の表現を欠く。おそらくは口先に別の粘土円板を貼り付け、口、鼻孔を切り込んでいたものが剥落してしまったのであろう。耳は中空式に作られる。立髪は特徴的な表現である。断面T字形の板状立髪の先端に円柱形の角状立髪を組み合わせ、さらに角状立髪に接するように撥形の板状具を貼付している。轡は十字文楕円形鏡板付轡を丁寧に模倣したもので、同様の鏡板表現をもつ馬形埴輪が滑川町月輪55号墳からも出土している。面繋の革帯には粘土粒を貼付した装飾が施される。胸繋には本来、左右に馬鐸を装着していたようであるが、右側のみが残る。馬鐸はU字形に大きく刳り込み、外面に斜格子状に線刻を施す。内面には舌を表現した粘土紐が一部残る。鞍は前輪、後輪とも垂直に立てた竪鞍で、障泥は粘土板を貼り付け、粘土紐で輪鐙を表現する。障泥には板押圧痕が平行線状に残る。胴部には前後に透孔が穿たれる。尾は粘土紐を巻き上げた中空式で、先端が尖る。尻繋は残りが悪く明瞭でないが、円環状の粘土紐を中心に三方に房状の粘土紐を垂下し、さらに円環状の粘土紐を貼付する。総長82.0cm、総高75.0cm（推定）。

時期　第17号墳は、群中では必ずしも傑出した規模の古墳ではないが、ブリッジの左脇を中心に人物埴輪と馬形埴輪を樹立した埴輪群像の実態が明らかとなった。配列状況の詳細を復元することは難しいが、少なくとも二又の被り物の男子埴輪

1体、女子埴輪2体からなる人物埴輪と2体以上の飾馬から構成されたものであった。

築造時期を示す良好な土器が出土していないため、ここでは円筒埴輪や形象埴輪を中心に検討を行うこととする。円筒埴輪は外面調整に縦ハケを施すA類と、板ナデ調整を施すB類に大きく2分

第189表　第17号墳出土円筒埴輪観察表（第516～519図）

番号	器種	胎土	焼成	色調	残存	外面調整	本/2cm	内面調整	本/2cm	備考	図版
10	円筒	DEHI	B	B	40	縦ハケ	8	斜ハケ	8	№1　周溝　透孔一部残存	188-1
11	円筒	DEHI	A	B	40	縦ハケ	7	斜ハケ	8	周溝№2　周溝　透孔一部残存	188-2
12	円筒	DEHI	B	C	80	縦ハケ	7	斜ハケ	9	№71・72	187-1
13	円筒	CDEHI	A	B	40	縦ハケ	8	斜ハケ	8	X53G　№1　透孔一部残存	
14	円筒	CDEHI	B	B	25	縦ハケ	7	ナデ		№90　基部幅3.0cm	
15	円筒	CDEHI	B	B	25	縦ハケ	7	ナデ		№68　基部幅5.0cm	
16	円筒	DEHI	A	F	30	板ナデ		ナデ		周溝	188-3
17	円筒	DEHI	B	B	45	板ナデ		ナデ		墳丘　周溝　X53G　№4・5 透孔一部残存	187-2
18	円筒	DEHI	A	D	70	板ナデ		木口ナデ		№92　周溝　基部R接合　基部幅5.0cm	187-4
19	円筒	DEHI	A	C	70	板ナデ		ナデ		№60・79・81・82　周溝	187-5
20	円筒	DEHI	A	C	45	板ナデ		ナデ		周溝　透孔一部残存	
21	円筒	DEHI	A	B	70	板ナデ		ナデ		基部R接合　基部幅3.7cm	187-3
22	朝顔	DEHI	A	C	45	斜ハケ	7	横・斜ハケ	7	№28　周溝　擬口縁明瞭	187-6
23	朝顔	DEHI	B	C	60	斜ハケ	8	ナデ		№43・45　周溝	
24	朝顔	DEHIK	C	C	破片	縦ハケ		斜ハケ	7	X54G　№3　赤彩痕一部残存　器面磨耗	
25	朝顔	DEHI	A	C	破片	縦ハケ	8	斜ハケ・ナデ	8	№21　擬口縁明瞭	
26	朝顔	CDEHI	A	C	破片	縦ハケ	8	斜ハケ	8	№43　外面赤彩痕	
27	円筒	DEHIK	B	C	破片	縦ハケ	8	斜ハケ	7	№87	
28	円筒	DEHIK	B	C	破片	縦ハケ	7	斜ハケ	7	周溝　№2	
29	円筒	DEHI	A	B	破片	縦ハケ	7	斜ハケ	7	周溝	
30	円筒	CDEHI	A	B	破片	縦ハケ	8	斜ハケ	6	X54G　№1・3　透孔一部残存	
31	円筒	DEHIK	A	B	破片	縦ハケ	7	斜ハケ	7	周溝	
32	円筒	DEHIJ	B	B	破片	縦ハケ	8	斜ハケ	8	№97　透孔一部残存	
33	円筒	DEHIK	B	C	破片	板ナデ		ナデ		墳丘　赤彩痕	
34	円筒	DEHIK	A	C	破片	板ナデ		ナデ		№38	
35	円筒	DEHIK	A'	F	破片	板ナデ		ナデ			
36	円筒	CDEHIJ	A	B	破片	板ナデ		ナデ		墳丘	
37	円筒	DEHIK	B	C	破片	板ナデ		ナデ		№36	
38	円筒	DEHIJ	A	B	破片	板ナデ		ナデ		周溝	
39	円筒	CEHIK	A	B	破片	板ナデ		ナデ		№43	
40	円筒	DEHI	B	C	破片	板ナデ		ナデ		周溝　№105	
41	円筒	CEHIL	A	B	破片	板ナデ		ナデ		墳丘	
42	円筒	DEHI	A'	F	破片	板ナデ		ナデ		X53G　須恵質	
43	円筒	DEHIK	A	B	破片	板ナデ		ナデ		№10	
44	円筒	CEHIK	A	C	破片	縦ハケ	11	ナデ		器肉厚い	
45	円筒	CEHIK	B	B	破片	縦ハケ	8	斜ハケ	8	X53G　№1　墳丘　透孔一部残存	
46	円筒	CEHI	B	C	破片	縦ハケ	9	斜ハケ	9	№85　透孔一部残存	
47	円筒	CEHIJK	B	B	破片	縦ハケ	7	ナデ		周溝　透孔一部残存	
48	円筒	CEHIJ	A	B	破片	縦ハケ	8	斜ハケ	9	周溝　透孔一部残存	
49	円筒	CEHIK	A	B	破片	板ナデ		ナデ		透孔一部残存	
50	円筒	DEHIK	A	C	破片	板ナデ		ナデ		№102　透孔一部残存	
51	円筒	EGHI	B	B	破片	板ナデ		ナデ		墳丘	
52	円筒	DEHIK	A	C	破片	板ナデ		ナデ		X54G　№4	
53	円筒	CDEHI	A	C	破片	板ナデ		ナデ		周溝	
54	円筒	BCEHI	B	B	破片	板ナデ		ナデ		墳丘　底面棒状圧痕　基部幅3.3cm	

することができる。さらにB類は大型品のB1類と小型品で細身化したB2類に細分される。このうち全体の形の分かるB2類は、第1段の伸長化が著しく、器高に対する第1段長が48.1%を占める。この数値は、山崎武氏による埼玉県の円筒埴輪編年（山崎2000）に照らせばⅢ～Ⅳ期に該当し、6世紀中葉から後葉を中心とする年代に位置づけられる。しかし、A類やB1類の全容が不明なためB2類の特徴のみをもって時期比定することが可能か、検討の余地を残す。

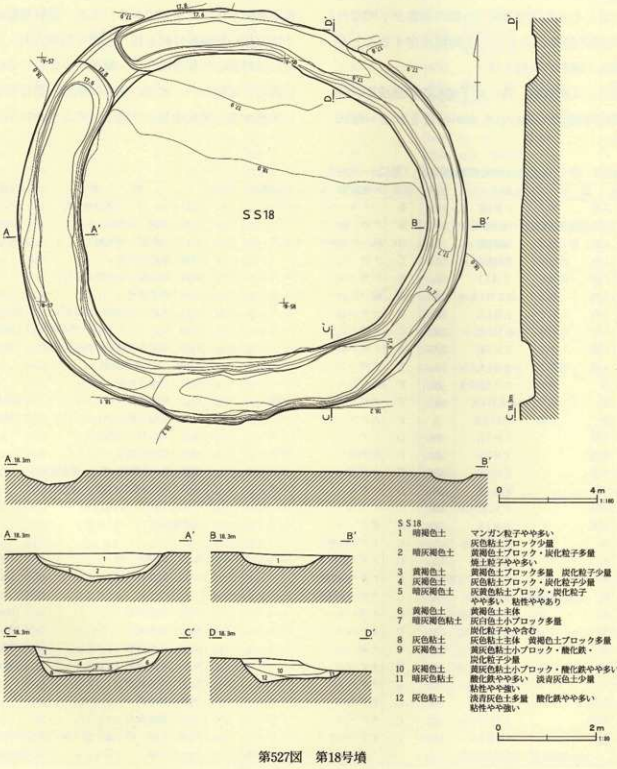
次に、人物埴輪、特に女子埴輪の頭部成形技法に新旧の技法が見られる点が注目される（塚田2007）。つまり、57の女子埴輪のように頭部全体を球形、もしくは後頭部の頭頂付近まで粘土紐を積み上げて頭部上半を丸く作り、髷を後頭部側が下がるように接合する特徴をもつ古い技法と、56の女子埴輪のように頭頂部を筒状の空洞となるように成形し、そこに扁平な板状の髷を接合して塞ぐ新しい技法が併存しており、埴輪工人の系譜関係を検討する上で重要である。また、馬形埴輪は十字文楕円形鏡板付轡を模した轡や馬鐸表現、さらには特異な立髪表現など、類例が少なく、その位置づけは難しい。本墳の築造時期は、第16号墳に後出する6世紀中葉に位置づけておきたい。

第190表　第17号墳出土形象埴輪観察表（第520～526図）

番号	器種	胎土	焼成	色調	外面調整　本/2cm	内面調整　本/2cm	備考	図版
55	人物　男子	EHIK	A	B	ハケメ・ナデ　9	ナデ	№14・44・47　二又の被り物	195-1
56	人物　女子頭部	DEHIK	A	B	ナデ・縦ハケ　7	ナデ	№46　周溝　撥形髷	195-2
57	人物　女子頭部	EHIK	A	B	縦ハケ・ナデ　9	ナデ	№11　台形髷一部欠損	195-3
58	人物　美豆良	EHIK	A	C	ナデ	—	周溝　縦位の沈線	
59	人物　頸飾り	EHIJ	A	B	ナデ	—	周溝　粘土紐に粘土粒を貼付	
60	人物　胴部	DEHIJ	A	B	縦ハケ　7	ナデ	№44　腰帯表現	
61	人物　左手	EHIK	A	B	ナデ	—	№15　木芯中空成形　外面板圧	196-1
62	人物　左手	EHIK	A	C	ナデ	—	X54G　№2　木芯中空成形　外面板押圧	196-2
63	人物　左手	EHIK	A	B	ナデ	—	№60　木芯中空成形　外面板押圧	196-3
64	人物　腕基部	EHIK	A	B	ナデ	—	№103　木芯中空成形	
65	馬　脚部	EHIK	A'	F	縦ハケ　7	ナデ	№67　切開再接合	
66	馬　尻尾	DEHIK	A'	F	ナデ	ナデ	№27　中空成形	196-4
67	馬　鞍	EHIJK	A	C	ナデ	—	№26　前輪の破片か	196-5
68	不明	EHIK	B	D	ナデ	ナデ	墳丘　馬の耳の付根か	
69	不明	EHIK	B	D	板押圧	ナデ	墳丘　馬の尻繋か	
70	不明	EHIK	B	C	ナデ	ナデ	周溝　馬の面繋の一部か　赤彩痕あり	
71	不明	EHIK	B	D	ナデ	ナデ	周溝　馬の面繋の一部か　赤彩痕あり	
72	不明	CEHI	A	C	ナデ	—	№100　赤彩	
73	不明	EHIK	A	C	ナデ	—	赤彩痕あり	
74	馬	EHIK	A	C	ナデ・板押圧	—		
75	馬	EHIK	A	C	ナデ・板押圧	—	№25　尻繋の一部	
76	馬	EHIK	A	C	ナデ・板押圧	—	№22　尻繋の一部	
77	馬　輪鐙	EHIK	A	C	ナデ・板押圧	—		
78	馬　鈴	EHIK	A	C	ナデ	—	№32　中実成形	196-6
79	馬　鈴	EHIK	A	C	ナデ	—	№31　中実成形	196-7
80	馬　鈴	EHIK	A	C	ナデ	—	№16　中実成形	196-8
81	馬　鈴	EHIK	A	C	ナデ	—	№29　中実成形	196-9
82	馬　鈴	EHIK	A	C	ナデ	—	№30　中実成形	
83	不明	EHIK	B	C	ナデ	ナデ	周溝　飾金具か	
84	不明	EHIK	B	C	ナデ	ナデ	№26　飾金具か	
85	馬	DEHIK	A	C	ナデ・ハケメ　7	ナデ	周溝　№19・43・45・54・56・57・59・61～64	197-1～4 198-1～6

第18号墳（第527図）

第18号墳は調査区南側中央のV－57・58グリッドを中心に位置する。調査区を東西に横断する第83号溝跡の南側に形成された一群の中では最も北寄りに所在する古墳である。南側には第15号墳が近接し、周溝同士が接した状態にある。本墳が、第15号墳の周溝を避けるように周溝外縁部を直線的に屈曲させていることから、第15号墳に後出するものと想定される。おそらく築造当時は周溝の上端が切り合うような状態にあったものと推定される。北東側には第19号墳が、第83号溝跡を隔てるように対峙しているが、本墳の東側及び西側に



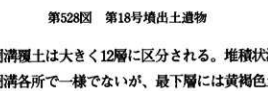
第527図　第18号墳

は古墳の所在しない空閑地が大きく広がっている。特に西側は、第79号溝跡までの約26mの間には古墳がまったく存在していない。この範囲には古墳築造直前まで3軒の住居跡（第120・121・219号住居跡）が存在していたことから、古墳の築造が禁忌されていたのであろうか。なお、本墳の南西側周溝は第121号住居跡と重複し、住居跡廃絶後の築造であることが確認されている。

北西に向くブリッジをもつ中規模の円墳で、墳丘径14.18×12.38m、周溝径18.46×16.76mを測る。墳丘盛土は既に削平されており、内部主体等は検出されなかった。

前述したように第83号溝跡と第15号墳に挟まれた位置にあるため、墳丘部の平面形態は正円を描かず、東西方向に潰れたやや歪んだ円形を呈している。周溝は、ブリッジを境に西側から南側にかけてはほぼ一定に巡らしているが、北側から東側に行くに従い、徐々に幅を減じ、掘り込みも浅くなっている。周溝幅1.68～2.64m、深さ0.25～0.56mを測り、周溝底面は概ね平坦で、凹凸は見られない。断面形は、墳丘側の立ち上がりが急角度な逆台形を呈している。

ブリッジは北西方向を向き、直線的に開口し、墳丘部よりも一段低く掘り窪められていた。主軸方位はN－42°－Wを示す。



第528図　第18号墳出土遺物

周溝覆土は大きく12層に区分される。堆積状況は周溝各所で一様でないが、最下層には黄褐色土をはじめ、灰色、暗灰色、暗灰褐色等の粘土が帯状に堆積し、粘土ブロック、炭化粒子、酸化鉄等を混入していた。概ね自然堆積を示す。

遺物は少なく、古墳に伴う遺物はまったく出土しなかった。図示したのは古墳時代前期の五領式期の東海系パレス壺の口縁部片で、古墳には伴わない。なお、埴輪はまったく出土していないことから、樹立されていなかったと推定される。

出土遺物

土器（第528図）　1は口縁部垂下帯に横線文を施文した後、キザミをもつ4条の棒状浮文を貼付したパレス壺の口縁部片である。小片のため棒状浮文の単位、条数等は不明である。周囲の住居跡からの混入と考えられる。

時期　第18号墳は出土遺物がなく築造時期は不明である。ただし、その占地状況が第15号墳を避けていることから、古墳群形成過程の後出段階の所産と考えておきたい。

第191表　第18号墳出土遺物観察表（第528図）

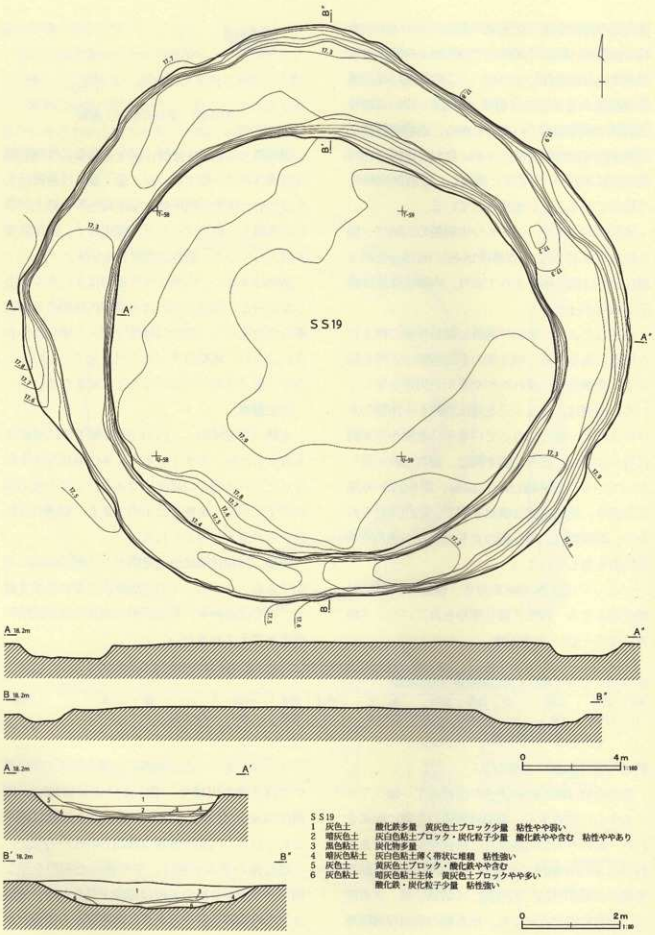
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	残存	焼成	色調	備　　考	図版
1	土師器	壺	－	2.2	－	EHIK	5	普通	橙	パレス壺	

第19号墳（第529・530図）

第19号墳は調査区中央やや南西のT－58グリッドを中心に位置する。第83号溝跡の北側に形成された一群のうち最も西寄りに所在する古墳である。西側は第79号溝跡まで約11mの空閑地が広がる。東側には第20号墳、南西側には第18号墳、北東側には第21号墳が近接する。南西側の第83号溝跡埋没後に築造された古墳である。

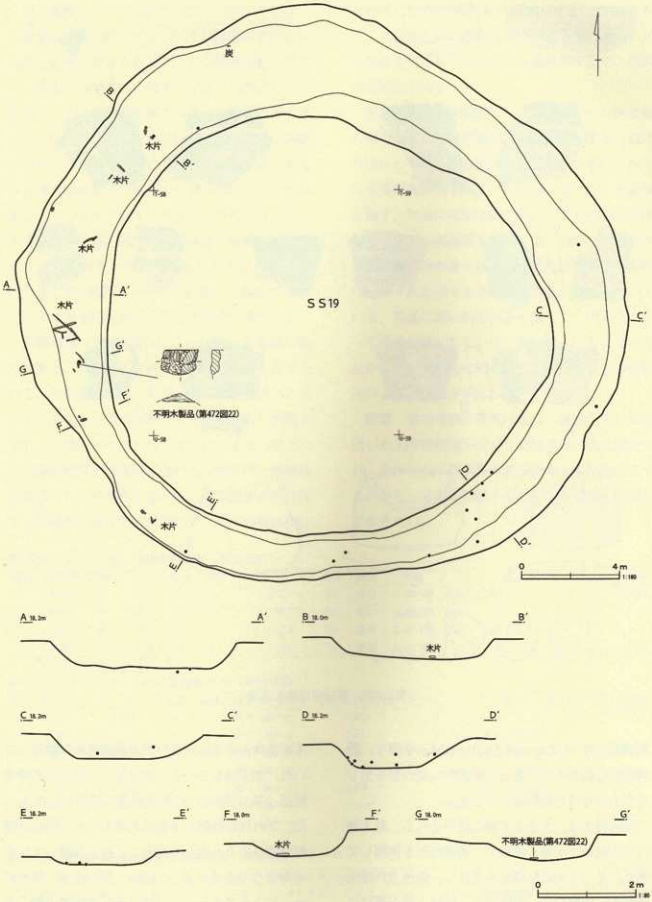
ブリッジをもたない周溝の全周するタイプの群中では大型の円墳で、墳丘径17.92×16.92m、周溝径24.80×23.32mを測る。墳丘盛土は既に削平されており、内部主体等は検出されなかった。

墳丘部の平面形態は、やや歪んだ円形を呈し、墳丘立ち上がり線の各所に屈曲が見られる。周溝は第83号溝跡を避けるように南西側から南側にかけて周溝の幅を狭め、掘り込みも浅くなっている。

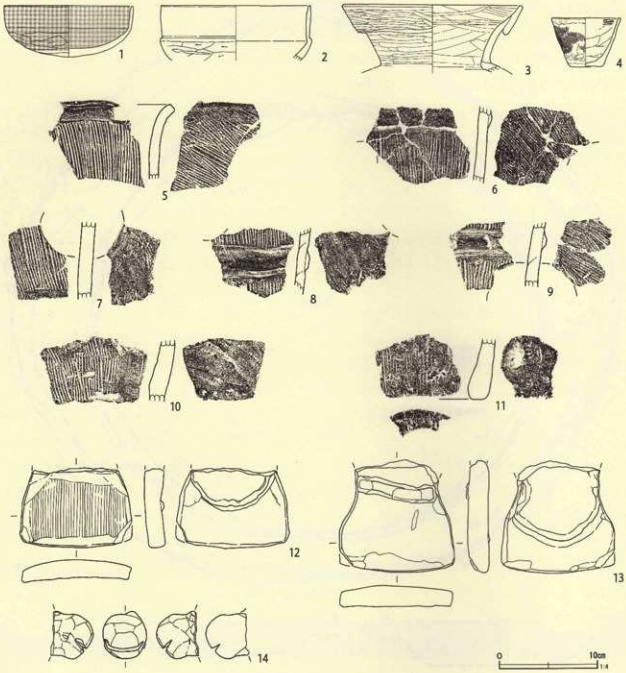


SS19
1　灰色土　酸化鉄多量　黄灰色土ブロック少量　粘性やや弱い
2　暗灰色土　灰白色粘土ブロック・炭化粒子少量　酸化鉄やや含む　粘性ややあり
3　黒色粘土　炭化物多量
4　暗灰色粘土　灰白色粘土薄く帯状に堆積　粘性強い
5　灰色土　黄灰色土ブロック・酸化鉄やや含む
6　灰色粘土　暗灰色粘土主体　黄灰色土ブロックやや多い
酸化鉄・炭化粒子少量　粘性強い

第529図　第19号墳（1）



第530図　第19号墳（2）



第531図　第19号墳出土遺物

周溝幅1.80～4.60m、深さ0.20～0.54mを測り、周溝底面は概ね平坦である。断面形は逆台形を呈し、立ち上がりは比較的緩やかである。

周溝覆土は、大きく6層に区分される。最下層には灰色粘土が薄く堆積し、周溝底面を被覆していた。その上には粘質土を主体に、灰色土、暗灰色粘土、黒色粘土、暗灰色土、灰色土等が帯状に堆積していた。また、周溝の西半分を中心に自然木を主体とする木片及び炭が周溝底面に散在していた。加工痕をもつものは少なく、僅かに不明木製品（第472図22）が西側周溝の底面から出土した。これは直柄鍬の未製品と考えられ、柄孔の隆起を削り出そうとして失敗し、身と分離してしまったようである。長さ14.9cm、幅10.2cm、厚さ37cm、ヒノキである。この他に南東側周溝の覆土から土器及び埴輪の破片が出土した。

出土遺物

土器（第531図）　1・2は土師器坏で、古墳に伴うものと考えられる。1は口縁部が短く直立し、体部との境に弱い稜を有する。内外面に赤彩を施す。2は坏蓋模倣坏である。口縁部は長く直立し、口唇部に端面を作り出す。体部の境に明瞭な段を作り出した復元口径15.3cmの大型品である。3は複合口縁壺の口縁部から頸部の破片で、内外面にヘラミガキを施す。4はコップ形のミニチュアである。平底の底部から、体部が直線的に外傾して立ち上がり、口唇部は折り返し状に膨らむ。内外面に目の細かいハケメを施し、器壁は薄い。3・4は古墳時代前期の五領式期の所産である。

円筒埴輪（第531図）　5～11は円筒埴輪の破片である。いずれも2条突帯3段構成品と考えられる。外面調整は縦ハケで、内面調整は斜ハケ及びナデを施す。突帯は断面低台形ないし三角形を呈し、下端のナデ付けはやや粗雑である。胎土に白色針状物質を特徴的に含むものが多い。色調は赤褐色ないし橙褐色を呈する。5は緩やかに外反する口縁部の破片で、外面のヨコナデの幅は狭い。6～9は円形の透孔を一部残存する。このうち7・9は穿孔後、透孔に指ナデを丁寧に施す。10は基部を欠損している。11は底面が平坦で、色調は淡褐色である。

形象埴輪（第531図）　12・13は女子人物埴輪の髻である。粘土板成形で、撥形を呈する。12は外面にハケメ、内面にナデを施す。内面には円形の頭頂部剥落痕を残す。13は内外面ともナデ調整を施す。外面には粘土紐を貼付して元結紐を表現しているが、両端部を欠損する。内面には円形の頭頂部剥落痕が良く残る。14は馬形埴輪の胸繋等に貼付された鈴である。粘土塊を丸めて形作っている。基部に細い粘土紐を充填して、指ナデによって本体に貼付している。鈴口はヘラ先によって左から右に直線的に切り込む。鈴口部分には板押圧による平坦面が見られる。

時期　第19号墳の築造時期は、周溝出土の大型化した土師器模倣坏がMT15型式併行期と推定され、全体として銭塚Ⅳ期新段階の土器様相を示すことから、6世紀初頭を中心とした年代に比定しておきたい。

第192表　第19号墳出土遺物観察表（第531図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(13.2)	5.2	—	EHIJ	40	普通	にぶい橙	赤彩　U58G	179-3
2	土師器	坏	(15.3)	5.6	—	ACHI	30	良好	にぶい橙	U58G	
3	土師器	壺	18.2	6.8	—	EHIJK	70	普通	にぶい橙	T58G　S58G№3	
4	土師器	ミニチュア	(7.0)	5.0	3.3	CEHI	70	普通	にぶい橙		179-4

第193表　第19号墳出土円筒埴輪観察表（第531図）

番号	器種	胎土	焼成	色調	残存	外面調整	本/2cm	内面調整	本/2cm	備考	図版
5	円筒	DEHI	A	C	破片	縦ハケ	7	斜ハケ	8	T59G	
6	円筒	EHIJK	B	B	破片	縦ハケ	8	斜ハケ	8	U59G　透孔一部残存	
7	円筒	DEHIJK	A	B	破片	縦ハケ	8	斜ハケ・ナデ		T58G　透孔一部残存	
8	円筒	DEHIJK	A	B	破片	縦ハケ	9	ナデ		U58G　透孔一部残存	
9	円筒	EHIJK	A	B	破片	縦ハケ	8	斜ハケ	7	T59G　透孔一部残存	
10	円筒	DEHIJ	A	C	破片	縦ハケ	7	ナデ		T58G	
11	円筒	DEHIK	B	D	破片	縦ハケ	8	ナデ		T58G	

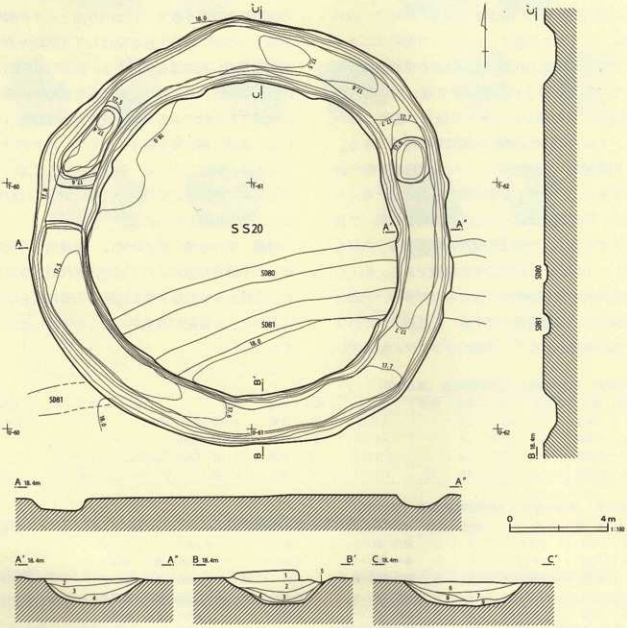
第194表　第19号墳出土形象埴輪観察表（第531図）

番号	器種	胎土	焼成	色調	外面調整	本/2cm	内面調整	本/2cm	備考	図版
12	人物　髻	DEHIJ	B	B	ハケメ・ナデ	7	ナデ		T58G　板状撥形髻	199-1
13	人物　髻	DEHI	A	D	ナデ		ナデ		T58G　板状撥形髻	199-2
14	馬　鈴	DEHIJ	B	C	ナデ		—		T58G　粘土塊成形	199-3

第20号墳（第532・533図）

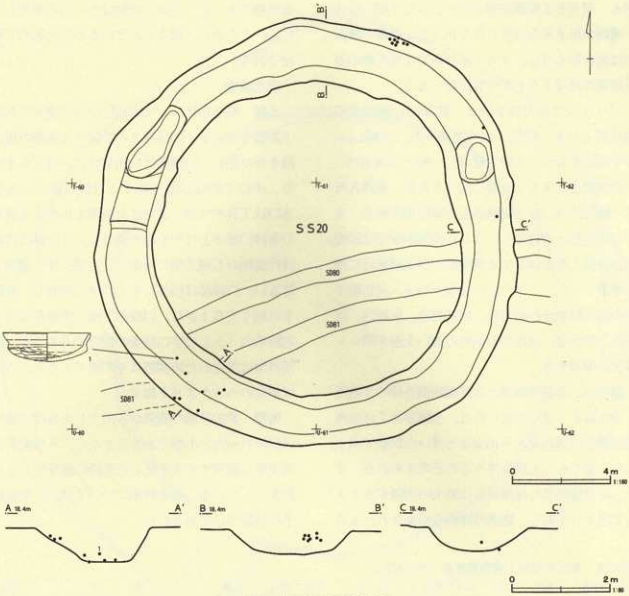
第20号墳は調査区中央やや南東のT－60・61グリッドを中心に位置する。東側に第23号墳、南東側に第26号墳、西側に第19号墳、北西側に第21号墳が近接し、これらの古墳に囲まれた位置に所在する。特に第21号墳及び第23号墳とは１ｍ以内に接近しており、古墳築造当時は周溝同士が切り合っていた可能性が高い。これらの５基の古墳は第83号溝跡の北側に位置する古墳として一つの小群を形成している。

西に向くブリッジをもつ中規模の円墳で、墳丘径12.70ｍ、周溝径17.18ｍを測る。墳丘部の南半



SS20
1　灰褐色土　　マンガン粒子多量　粘性弱い
2　暗黄褐色土　　黄褐色土小ブロックやや多い　焼土粒子・炭化粒子少量　粘性弱い
3　暗褐色土　　黄褐色土小ブロック多量　灰色粘土小ブロック・炭化粒子少量
4　暗灰褐色粘土　暗灰色粘土主体　黄褐色土ブロック多量　炭化粒子少量　粘性あり
5　黄褐色土　　黄褐色土・淡青灰色砂質土主体　粘土多量
6　灰色土　　炭化粒子少量　酸化鉄沈着
7　暗灰色土　　灰褐色土ブロック・炭化粒子少量　酸化鉄沈着
8　淡灰色土　　灰褐色土ブロックやや多い　灰色粘土ブロック少量　酸化鉄沈着
9　灰色粘土　　淡青灰色砂質土多量　炭化粒子少量　酸化鉄沈着

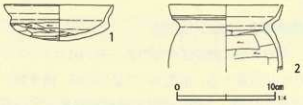
第532図　第20号墳（１）



第533図　第20号墳（2）

分に第80号溝跡及び第81号溝跡が重複しており、墳丘部及び周溝の一部が壊されていた。墳丘盛土は既に削平されており、内部主体等は検出されなかった。

墳丘部の平面形態は、墳丘立ち上がり線の各所に小さな屈曲が見られるものの、比較的整った円形を呈する。周溝は北西側に所在する第21号墳を避けるために、北西側周溝の外縁部がやや直線的になっているほかは、ほぼ一定の幅で巡っている。周溝底面は東側の標高が高く、西に向かって緩やかに傾斜している。周溝幅2.00～2.48m、深さ0.22～0.70mを測る。底面はほぼ平坦であるが、北東



第534図　第20号墳出土遺物

側と北西側の2箇所に土壙状の落ち込みが検出された。北東側周溝の土壙は平面楕円形を呈し、長径1.84m、短径1.44m、周溝底面からの深さ0.10mを測る。また、北西側周溝の土壙はブリッジに接するように掘り込まれた長楕円形を呈し、長径3.18m、短径1.30m、周溝底面からの深さ0.20mを

測る。双方とも周溝埋葬を示すような土層の変化や遺物の出土状況は見られなかった。周溝の断面形は逆台形を呈し、立ち上がり角度は墳丘側の方が周溝外縁部よりもやや急傾斜である。

ブリッジは西方向を向き、直線的に開口する。墳丘部よりも一段低く掘り窪められ、上幅1.4mの平坦面をもつ。主軸方位はN－80°－Wを示す。

周溝覆土は大きく9層に区分される。周溝各所で一様ではないが、周溝底面を暗灰褐色粘土、ないし灰色粘土が被覆し、さらに南側周溝では淡青灰色砂質土を主体とする黄褐色土が周溝底面に薄く堆積していた。その上には焼土粒子・炭化粒子等の混入物を含む暗褐色、暗黄褐色、灰褐色、淡灰色、暗灰色、灰色等の粘性の強い土層が凹レンズ状に堆積する。

遺物は、南西側周溝と北東側周溝外縁の2箇所に小さなまとまりが見られた。土師器坏1は南西側周溝の周溝底面から16cmほど浮いた状態で出土した。おそらく古墳に伴うものと考えられる。また、北東側周溝外縁部からは拳大の円礫がまとまって出土しており、周溝外側から廃棄されたような状態であった。なお、埴輪はまったく出土していないことから、樹立されていなかったものと推定される。

出土遺物

土器（第534図）　1は口径11.1cmに復元される土師器坏である。口縁部とやや扁平な体部の境に段を作り出し、口縁部は内屈気味に一旦立ち上がり、中位で屈曲して外傾する有段口縁坏である。木口状工具や沈線によって有段部を作出する通有の有段口縁坏とはやや趣が異なる。2の鉢は古墳時代前期の五領式期の所産で、古墳に伴う遺物ではない。口縁部は頸部からくの字に屈曲し、外開きに短く立ち上がり、口縁部下端に突線を巡らす。北陸系の「5」の字口縁甕の模倣であろうか。胴部外面は風化のため調整は不明瞭であるが、内面は横位のヘラケズリを施す。

時期　第20号墳の周溝から出土した有段口縁坏は口径11cm台と小型であることから、6世紀第3四半期に顕現する大型化した有段口縁坏よりも古相を示している。築造時期については、6世紀前半に位置づけておきたい。

第195表　第20号墳出土遺物観察表（第534図）

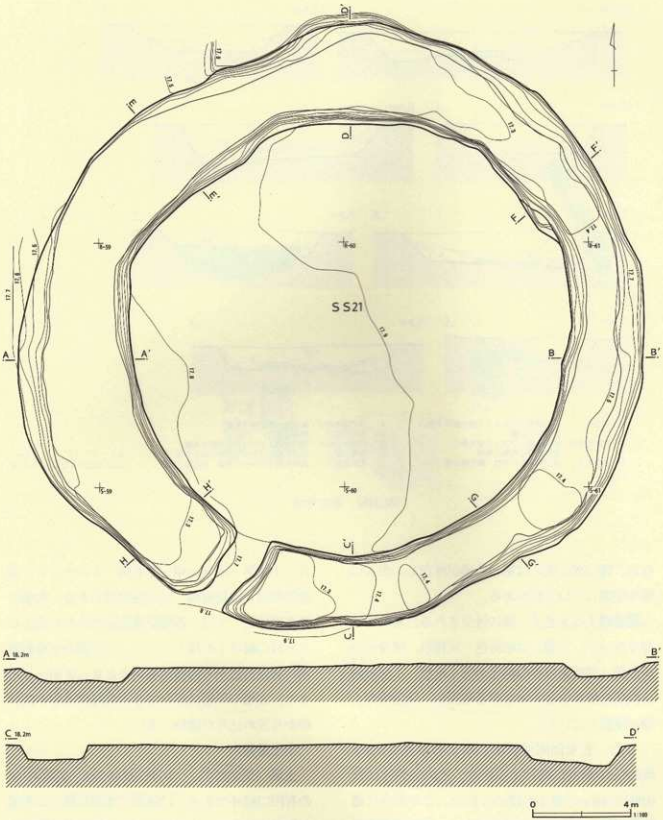
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(11.1)	3.6	－	EHIJK	75	普通	黒褐	有段口縁坏　内面赤褐　№1	179-5
2	土師器	鉢	(11.7)	6.8	－	BCEHIM	30	普通	にぶい褐		

第21号墳（第535～537図）

第21号墳は調査区中央のR－59・60グリッドを中心に位置する。南西側には第19号墳、南東側には第20号墳、北側には第22号墳が近接している。また、古墳の存在しない空閑地が東側及び西側に広がっている。

南西に向くブリッジをもつ群中では大型の円墳で、墳丘径17.60×17.56m、周溝径25.48×24.12mを測る。北側周溝部分を第98号溝跡と第99号溝跡が東西方向に横断し、周溝の一部を壊していた。また、墳丘盛土は既に削平されており、内部主体等は検出されなかった。

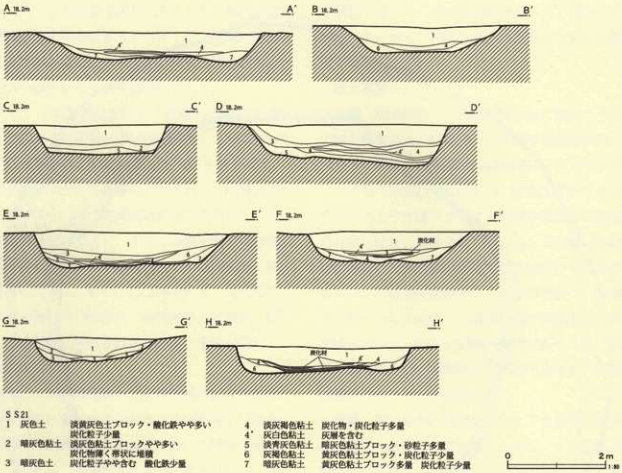
墳丘部の平面形態は、西にやや張り出した円形を呈し、墳丘立ち上がり線は各所で弱く屈曲する。また、墳丘部北東側立ち上がり線にはステップ状の造作が認められた。周溝は、ブリッジ左側から北側周溝にかけては幅が一定で広くなっているが、北側から北東側にかけて徐々に幅を減じている。周溝外縁部は各所で屈曲し、特に北側周溝外縁部は内側に湾曲していた。周溝幅2.48～4.64m、深さ0.44～0.72mを測る。周溝底面はほぼ平坦で、東から西に向かって緩やかに傾斜している。断面



第535図　第21号墳（1）

形は逆台形を呈し、墳丘側は急角度で立ち上がり、周溝外縁側は緩やかに立ち上がる。

ブリッジは南西方向を向き、やや西に屈曲した状態で開口する。主軸方位はN－147°－Wを示す。



第536図　第21号墳（2）

なお、開口部正面には第19号墳が所在し、出入口部を閉塞している感がある。

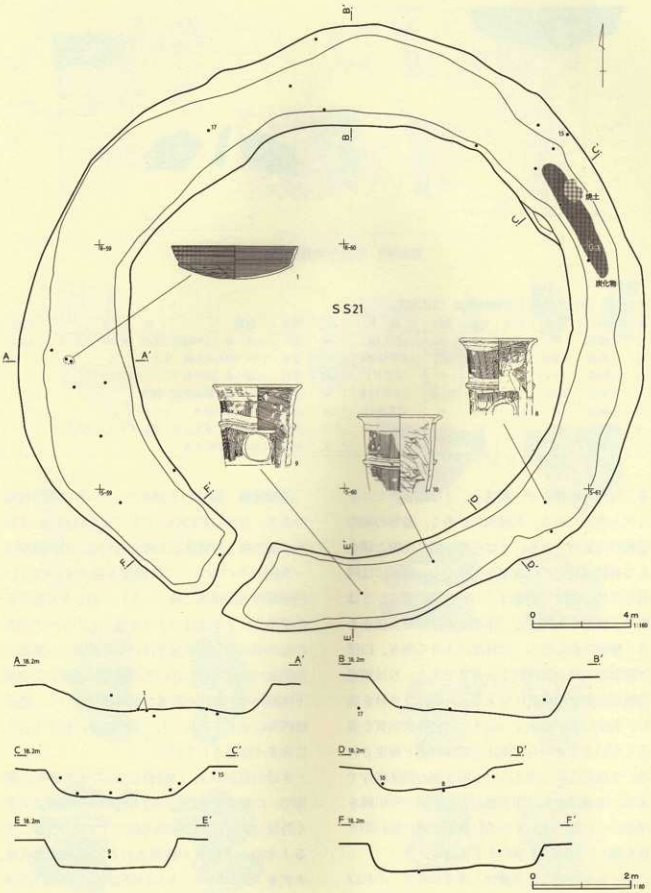
周溝覆土は大きく7層に区分される。各所で一様でないが、下層には暗灰色、灰褐色、淡青灰色、灰白色、淡灰褐色等の粘土が薄く堆積し、部分的に炭化材層を介在させながら暗灰色、灰色等の土層が堆積していた。

また、北東側周溝底面に炭化物が長さ5.2m、幅0.8mの範囲に帯状に広がり、その一角には径0.86×0.68mの焼土が認められた。この部分に遺物等が集中するような様子はなく、溝中埋葬等の可能性は低い。おそらく、古墳によって壊された第239号住居跡の床面上に堆積していた有機物（ムシロなど）に起因する可能性が考えられる。

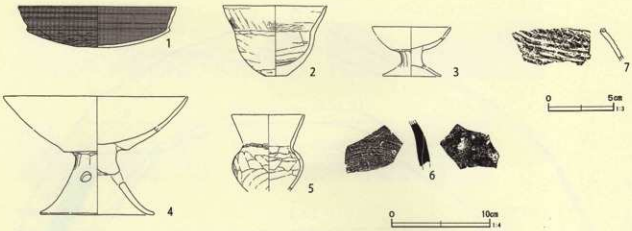
遺物は、周溝の各所に散在しており、土師器坏・小型鉢・高坏・坩・叩き甕・ミニチュア、須恵器提瓶、円筒埴輪、形象埴輪等がある。古墳に伴う遺物としては、西側周溝底面中央から出土した有段口縁坏1のほか、ブリッジ右側の南東側周溝の底面付近から円筒埴輪がまとまって出土した。また、古墳の下層に所在する古墳時代前期の住居跡から流れ込んだ遺物も多い。

出土遺物

土器（第538図）　1は口径16.2cm、器高4.2cmの有段口縁坏である。口縁部と体部の境には明瞭な段部を形作り、口縁部には木口状工具を用いて2段に段部を作出している。内外面に黒色処理を施す。2は小さな平底をもつ広口の小型鉢である。底部は器肉が厚く、外面下端にヘラケズリを施す。頸部の括れは弱く、口唇部は摘み出しによって尖



第537図　第21号墳（3）



第538図　第21号墳出土遺物（1）

第196表　第21号墳出土遺物観察表（第538図）

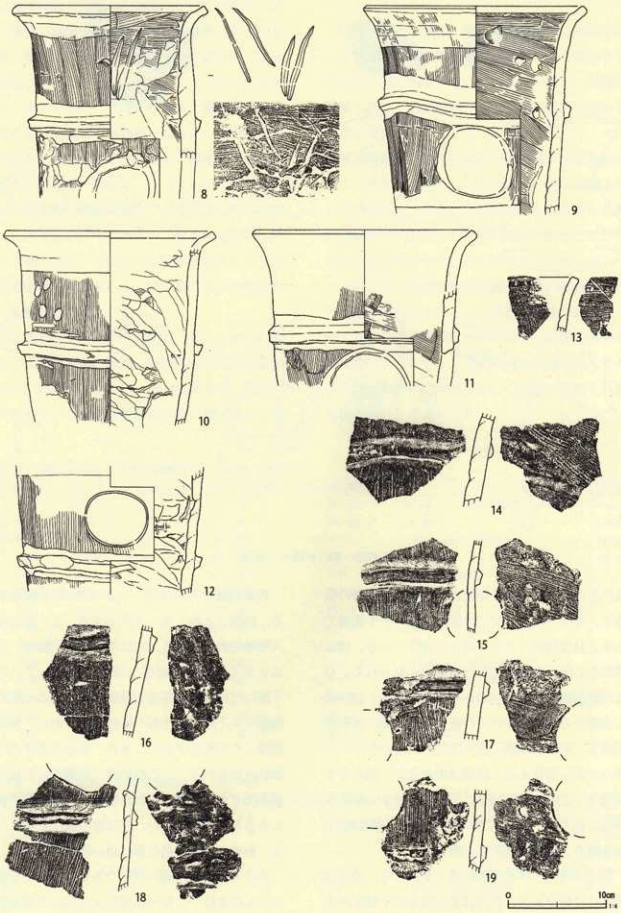
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	残存	焼成	色調	備　　考	図版
1	土師器	坏	16.2	4.2	－	CHIK	90	不良	にぶい橙	内外面黒色処理　R58G　№2・3	179-6
2	土師器	小型鉢	(10.6)	7.1	2.3	CEGHI	65	普通	にぶい黄橙	赤彩痕　№2	
3	土師器	ミニチュア	－	3.2	－	CEHI	50	普通	にぶい褐	高坏形	
4	土師器	高坏	－	8.9	(11.8)	CEHIJK	40	普通	にぶい橙	器面磨耗　顕著	
5	土師器	坩	(7.4)	7.8	－	CEHIJ	50	普通	にぶい黄橙	周溝	
6	須恵器	提瓶	－	4.7	－	AEIJK	5	良好	灰黄	南比企窯　外面カキ目　内面ナデ	
7	土師器	甕	－	2.6	－	EHIJ	5	普通	にぶい黄褐	叩き甕	

る。外面に赤彩痕が一部残る。3は高坏のミニチュアと考えられる。欠損部分が多く、蓋等の他の器種の可能性もある。4は坏部下端に明瞭な稜をもつ有稜高坏で、口縁部を欠損する。脚部には円孔を三方に開け、裾部は「ハ」の字に開く。5は坩で、底部を欠損する。体部は中位に最大径をもち、算盤玉形に近い。口縁部は大きく開き、口径は胴部最大径とほぼ同じ大きさである。6は須恵器提瓶の閉塞部の破片である。外面にカキ目を施し、内面にナデを施す。胎土に白色針状物質を混入していることから、南比企窯跡群産と推定される。7は近江系と考えられる叩き甕の頸部破片である。本遺跡からは叩き甕が、住居跡や河川跡を中心に一定量出土している。胴部外面に粗い叩き目を施し、内面に丁寧にナデを施す。

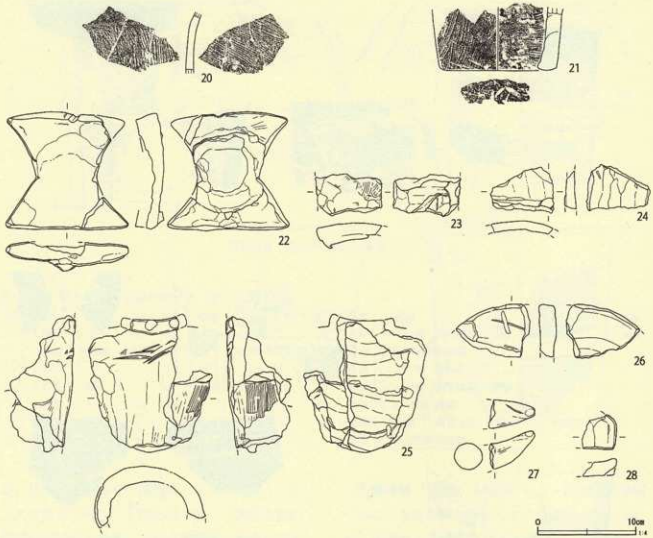
1・6が古墳に伴う遺物と考えられる。それ以外は古墳時代前期の五領式期の所産であり、周辺の住居跡からの混入であろう。

円筒埴輪（第539・540図）　8～21は円筒埴輪である。全体の形の分かるものはないが、いずれも2条突帯3段構成品と考えられる。外面調整は一次縦ハケのみで、二次調整を施すものはない。内面調整は口縁部に横ハケないし斜ハケを施すものが多く、下半部はハケメを施すものとナデのみのものがある。突帯は全体にやや貧弱で、断面三角形ないし五角形に近いものが多い。総じて突帯下端部のナデつけが粗雑な個体が目につく。透孔は円形によって占められ、第2突帯に接するように大きく穿孔されている。

8は口径20.0cm、口縁長12.2cmのやや細身の個体で、口縁部が楕円形に焼き歪む。口縁部は大きく外反して開く。口縁部内面には太めの沈線による4本のヘラ描きが観察される。透孔は穿孔後、ナデを入念に施す。9は口径22.9m、口縁長10.8cmで、大きめの透孔を中間段に穿孔する。突帯の貼り付けは、大きく波打つことから、割付線等は



第539図　第21号墳出土遺物（2）



第540図　第21号墳出土遺物（3）

ないものと思われる。10は、8と同じく細身の個体で、突帯下端のナデつけが他に比べやや粗雑である。11は段間に大きく透孔を開けている。12は突帯の一部に作製時における変形が見られる。13は口縁部内面に「×」のヘラ描きを施す。19は第1突帯から透孔にかけての破片で、外面に赤彩痕が残る。20は口縁部に近い部位で、縦ハケの下に斜ハケが一部見える。色調は橙褐色で、他とやや異なる。21は底部の破片で、底径12.2㎝を測る。外面に縦ハケ、内面に横ハケを施す。基部幅4.0㎝を測り、底面には圧痕が残る。

胎土は角閃石や石英等の混入が目立ち、焼成は全体に良好である。色調は乳白色を示す個体が主体を占める。

形象埴輪（第540図）　22～28は形象埴輪である。種類は人物・馬・不明がある。22・23は女子人物埴輪の髷である。22は板状の台形髷で、上面は大きく剥落し元結等はほとんど残っていない。下面には円形の頭頂部剥落痕が良く残る。髷の前面部中央下面に粘土粒が貼付されており、竪櫛を表現した可能性がある。また、髷の後面中央には棒状圧痕が残る。この痕跡は、乾燥時における変形を防ぐために用いられた補助具の痕跡の可能性もあるが明確ではない。23は髷の破片と考えられる。おそらく髷の括れ部に近い部位であろう。

24は人物埴輪の顔の破片である。左耳から額にかけての部位で、僅かに盛り上がった左眉と粘土板を貼り付け円環状に表現した耳孔の一部が残る。

25は人物埴輪の頸部から胸部にかけての破片である。頸部に頸飾りを表現する。頸飾りは粘土紐を一重に巻き付け、その上に粘土粒を貼付し、丸玉を表現していたことが、剥離痕から分かる。胸部にはヘラキズ風のヘラ描きがある。意図的に施文されたものであるのか判然としない。胴部は粘土紐の巻き上げによって成形され、腕部挿入孔及び脇の下の円孔を一部残す。

26・27は馬形埴輪の破片である。26は鞍の前輪もしくは後輪の破片であろう。粘土板成形で、ナデを丁寧に施し、側面には赤彩痕が微かに残る。27は尻尾の先端であろう。粘土塊による中実成形で、先端部は尖る。

28は器種不明の板状の破片である。女子の髻、あるいは馬形埴輪の障泥の可能性が考えられるが、小片のため判然としない。粘土板成形で、器面にナデを施す。なお、形象埴輪は北西側周溝から主に出土している。

時期　第21号墳は、南西側に隣接する第19号墳とほぼ同じ大きさの円墳である。この2基からなる単位小群を形成していた可能性が高い。同様の単位小群は、第24号墳と第25号墳の間にも認めることができる。

築造時期は、淡褐色系の円筒埴輪が主体を占めることから、全体として赤褐色系の円筒埴輪よりも古相を示す。しかし、周溝底面から出土した有段口縁坏が大型化した段階の所産であることから6世紀後半代を中心とする年代を示している。

このように円筒埴輪の色調や突帯の形状等に古い様相が見られることから検討の余地を残すものの、古墳の築造時期については6世紀第3四半期に位置づけておきたい。出土遺物の様相からすれば、古墳群の中では最も新しい段階に築造された古墳の一つと考えられる。

第197表　第21号墳出土円筒埴輪観察表（第539・540図）

番号	器　種	胎　土	焼成	色調	残存	外面調整　本/2cm	内面調整　本/2cm	備　　考	図版
8	円筒	DEHI	B	E	90	縦ハケ　11	横・斜ハケ　14	№1・3　口縁部内面ヘラ描き	189-1・2
9	円筒	CDEHI	B	E	60	縦ハケ　11	横・斜ハケ　10	№1	189-3
10	円筒	DEHI	A	E	45	縦ハケ　11	ナデ	№2　透孔一部残存	189-4
11	円筒	DEHI	A	E	25	縦ハケ　11	斜ハケ・ナデ　11	G59G	189-5
12	円筒	DEHI	A	E	40	縦ハケ　11	ナデ	透孔一部残存	
13	円筒	CEHIK	A	E	破片	縦ハケ　13	横ハケ　11	内面「×」ヘラ描き	
14	円筒	CEHIK	A	E	破片	縦ハケ　8	斜ハケ　10	器肉厚い	
15	円筒	CEHIK	A	E	破片	縦ハケ　11	斜ハケ　10	Q60G№5　透孔一部残存	
16	円筒	CEHIK	B	D	破片	縦ハケ　10	ナデ		
17	円筒	CEHIJ	B	E	破片	縦ハケ　11	ナデ・斜ハケ	S59G№1　透孔一部残存	
18	円筒	EHIJK	A	E	破片	縦ハケ　11	ナデ	Q59G　透孔一部残存	
19	円筒	EHIK	A	D	破片	縦ハケ　10	横ハケ　10	SJ286　外面赤彩痕　透孔一部残存	
20	円筒	CEHIK	A	C	破片	縦ハケ　10	横ハケ　10		
21	円筒	CEHIK	A	E	20	縦ハケ　11	横ハケ　11	基部幅4.0cm	

第198表　第21号墳出土形象埴輪観察表（第540図）

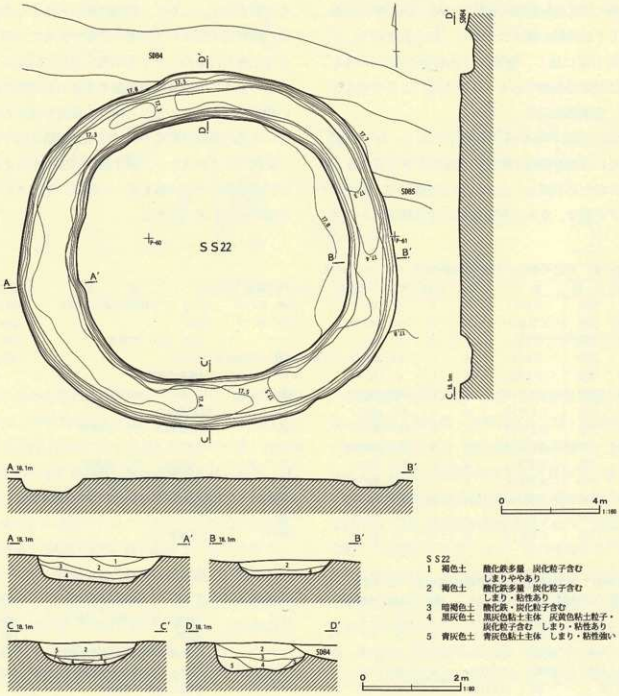
番号	器　種	胎　土	焼成	色調	外面調整　本/2cm	内面調整　本/2cm	備　　考	図版
22	人物　髻	DEHIJ	A	D	ナデ	ナデ	Q59G　板状台形髻　竪櫛表現か	199-5
23	人物　髻	DEHI	B	D	ナデ・ハケメ	ナデ	Q59G	199-4
24	人物　額部	DEHI	B	E	ナデ	ナデ	額から耳にかけての破片か	199-6
25	人物　胴部	CDEHI	A	E	ナデ・ハケメ　9	ナデ	Q59G　粘土紐に粘土粒を貼付した頸飾り	199-7
26	馬　鞍	DEHI	B	E	ナデ	ナデ	側面に赤彩一部残存	
27	馬　尻尾	CDEHI	A	C	ナデ	―	中実成形	
28	不明	DEHI	B	E	ナデ	ナデ	板状破片　髻か	

第22号墳（第541・542図）

第22号墳は調査区中央やや北寄りのP－59・60グリッドを中心に位置する。南側の第21号墳と北側の第24・25号墳の間に挟まれた狭小な空間に配置されたもので、その分布状況から第24・25号墳とともに一つの小群を形成している。

ブリッジをもたない周溝の全周する小規模な円墳で、墳丘径11.06×10.58m、周溝径15.20×14.54mを測る。墳丘部北側と北側周溝の一部を第84・85号溝跡が東西方向に重複し、削平する。

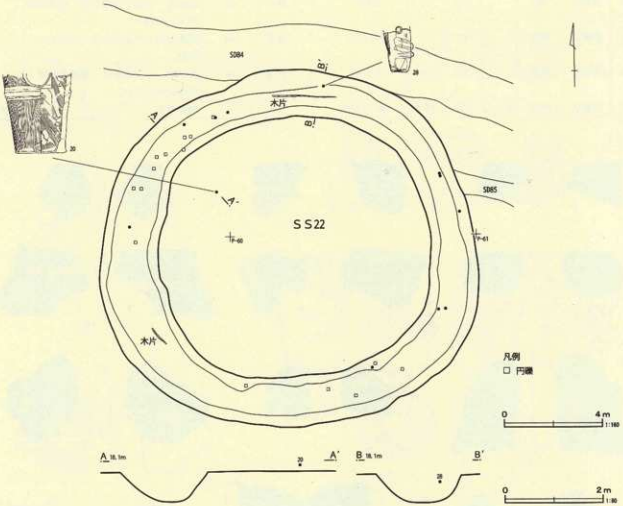
墳丘部の平面形態は、墳丘立ち上がり線が各所で緩やかに屈曲するものの、比較的形の整った円形を呈する。周溝は、南西側がやや幅広くなっているが、北東側ではやや幅を減じる。北西周溝外



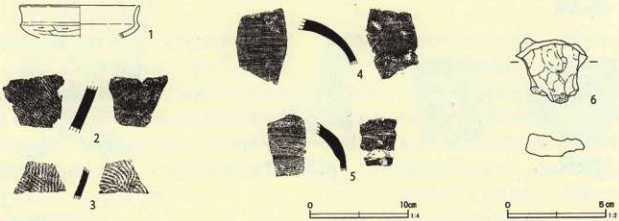
第541図 第22号墳（1）

縁部には屈曲する箇所が見られる。周溝幅1.84～2.30m、深さ0.28～0.56mを測り、周溝の掘り込みは東側が浅くなっている。周溝底面は緩やかな起伏をもつ。断面形は逆台形を呈し、墳丘側の立ち上がりは外側に比べやや緩やかである。

周溝覆土は大きく5層に区分される。周溝各所



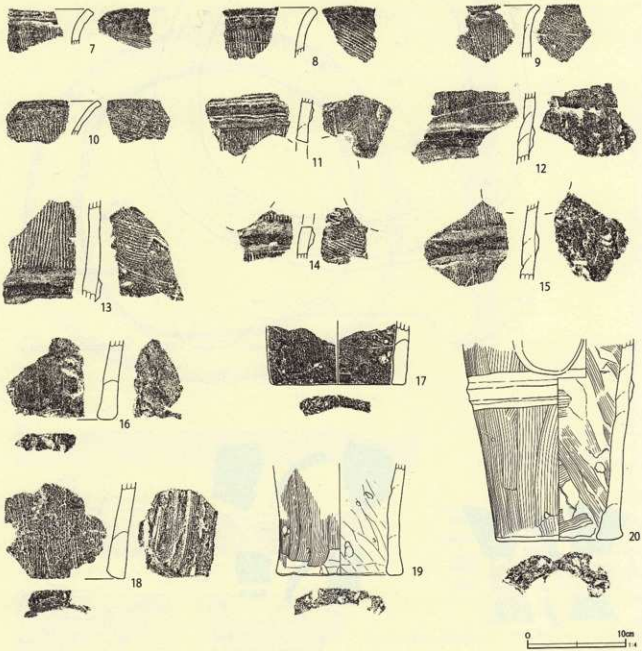
第542図　第22号墳（2）



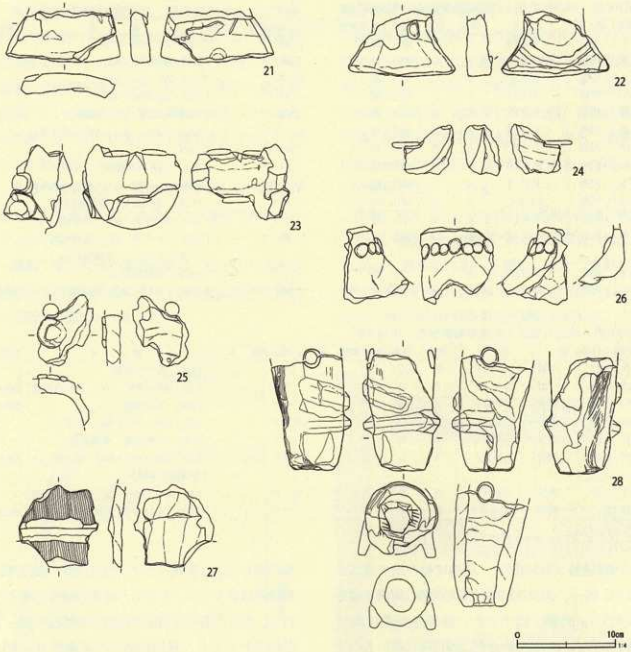
第543図　第22号墳出土遺物（1）

第199表　第22号墳出土遺物観察表（第543図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	残存	焼成	色調	備　考	図版
1	土師器	坏	(12.2)	3.3	—	CEHI	20	普通	にぶい黄橙	O59G	
2	須恵器	甕	—	4.5	—	EHIJ	5	良好	灰	南比企産　外面平行叩き目　内面ナデ　O59G	
3	須恵器	甕	—	3.3	—	EIK	5	良好	灰	在地産　外面平行叩き目　内面同心円文　O59G	
4	須恵器	提瓶	—	4.7	—	EIJK	5	普通	灰	南比企産　外面カキ目　内面ナデ　P59G	
5	須恵器	提瓶	—	4.9	—	EIK	5	普通	灰	在地産　外面カキ目一部櫛歯刺突　内面ナデ　O60G	
6	鉄製品	鉄滓	長さ3.2　幅3.6　厚さ1.1　重さ17.28							塊形滓か	179-7



第544図　第22号墳出土遺物（2）



第545図　第22号墳出土遺物（3）

で堆積状況は一様でないが、周溝底面を青灰色もしくは黒灰色の粘質土が被覆し、その上に暗褐色土と褐色土が堆積する。なお、周溝各所の覆土中から拳大の円礫が出土し、特に北西周溝に集中していた。また、周溝底面から長さ1ｍを超す木片が数箇所から出土したが、いずれも明瞭な加工痕等をもたない自然木であった。

出土遺物

土器（第543図）　1は口縁部と体部の境に段をもち、口縁部の外反する土師器坏蓋模倣坏である。2・3は須恵器甕の胴部片である。2は外面に平行叩き目、内面はナデを施す。胎土に白色針状物質を含んだ南比企窯跡群の製品である。3は外面平行叩き目、内面は同心円文当て具痕を残す。4・5は須恵器提瓶の体部片で、同一個体の可能性がある。4は外面にカキ目を施し、内面にナデを施す。胎土に白色針状物質を含む。5はカキ目の後に、櫛歯刺突文が施される。

第200表　第22号墳出土円筒埴輪観察表（第544図）

番号	器種	胎土	焼成	色調	残存	外面調整	本/2cm	内面調整	本/2cm	備考	図版
7	円筒	CEHIK	B	D	破片	縦ハケ	12	斜ハケ	11	N59・60～P59・60G	
8	円筒	CEHIK	B	C	破片	縦ハケ	8	斜ハケ	8	N59・60～P59・60G	
9	円筒	CDEHI	B	C	破片	縦ハケ	10	斜ハケ	9	N59・60～P59・60G	
10	朝顔	CEHIJ	C	A	破片	縦ハケ	8	斜ハケ	8	N59・60～P59・60G	
11	円筒	CDEHI	A'	C	破片	縦ハケ	13	斜ハケ	11	L59G～O62G　透孔一部残存	
12	円筒	CEHIK	A	D	破片	縦ハケ	10	ナデ		L59G～O62G　胎土に凝灰岩粒を含む	
13	円筒	CDEHI	A	D	破片	縦ハケ	7	斜ハケ	8	O60G	
14	円筒	CEHIK	B	D	破片	縦ハケ	7	斜ハケ	7	墳丘　透孔一部残存	
15	円筒	CEHIK	A	B	破片	縦ハケ	10	ナデ		N59・60～P59・60G　透孔一部残存	
16	円筒	CEHI	B	E	破片	縦ハケ		ナデ		O59G　器面磨耗　基部幅3.9cm	
17	円筒	CEHIK	B	D	25	縦ハケ	11	ナデ		N59・60～P59・60G　基部幅4.6cm	
18	円筒	CEHIK	A'	D	破片	縦ハケ	11	縦ハケ	11	N59・60～P59・60G　底部内面下端ヘラケズリ　基部幅4.7cm	
19	円筒	CDEHI	A	E	25	縦ハケ	8	ナデ		SJ246　基部幅4.1cm	
20	円筒	DEHI	A	D	50	縦ハケ	8	斜ハケ	9	O59G　№13　墳丘　基部幅3.6cm	189-6

第201表　第22号墳出土形象埴輪観察表（第545図）

番号	器種	胎土	焼成	色調	外面調整	本/2cm	内面調整	本/2cm	備考	図版
21	人物　髷	DEHI	B	C	ナデ		ナデ		P59G　板状台形髷	
22	人物　髷	DEHI	B	D	ナデ		ナデ		N59・60G～P59・60G　板状台形髷	199-8
23	人物　顔部	DEHI	A	D	ナデ		ナデ		P59G　耳環表現	200-1
24	人物　顔部	DEHI	A	D	ナデ		ナデ		N59・60G～P59・60G　顎部	
25	人物　顔部	DEHI	A	D	ナデ		ナデ		P59G　左側頭部　耳環表現	
26	人物　頸部	DEHI	A	D	ナデ		ナデ		N59・60G～P59・60G　粘土粒による頸飾り表現	200-2
27	人物　裾部	DEHI	A	D	ハケメ・ナデ	9	ナデ		N59・60G～P59・60G　透孔一部残存	
28	馬　頭部	CDEHI	B	E	ナデ・ハケ		ナデ		O60G　№1　円筒成形　側板剥落	200-3

円筒埴輪（第544図）　円筒埴輪の出土量は少ない。唯一、20のみが墳丘部北西側の周溝上端から約1.9m内側で出土した。底部を東側に向け、西側に倒れた状態であった。原位置に近いものであろう。いずれも2条突帯3段構成品と考えられる。法量は17が底径14.0cm、19が底径13.0cm、20が底径13.1cm、第1段長15.1cmを測る。外面調整は一次縦ハケのみで、内面調整は斜ハケを底部まで入念に施すものと、ナデ調整のみのものがある。突帯は断面が低平なM字形を呈するものが多い。透孔は円形で、第1突帯に接するように下側に穿孔する。12は胎土に凝灰岩の混入が目立つ。また、18は底部内面下端にヘラケズリを施している。

形象埴輪（第545図）　21・22は女子人物埴輪の髷である。粘土板成形による台形髷である。端部の切り込みは鋭角をなす。21は内面に頭頂部の剥落痕は見えないことから、前面の破片と考えられる。22は内面の頭頂部剥落痕が先端部に偏って貼付されており、後面の破片の可能性が大きい。23～25は人物埴輪の顔部の破片である。23は鼻を欠損した顔面の破片で、両目、口の切り込みが残る。耳は円孔を開け、その下端に円環状の粘土紐を貼付して耳環を表現する。24は口から顎にかけての破片である。口を小さく開け、円筒部に粘土を貼付して顔の輪郭を表現する。25は左耳付近の破片である。円形の耳孔と円環状の耳環を表現する。26は人物埴輪の頸部から肩部にかけての破片である。頸部に粘土粒を丸めた丸玉を密に貼付する。27は半身像の上衣の裾部の表現であろう。断面三角形の突帯を貼付しただけである。

28は馬形埴輪の頭部で、現存長11.8㎝、口先径4.5㎝の小型のものである。粘土紐により円筒形に頭部を成形し、口先は閉塞せず、開放している。端部には板押圧痕が残る。目を丸く開け、鼻孔の表現はない。頭絡の表現は側板が剥落しているため明確でないが、口先に粘土紐を巻き付けていたことが剥落痕から窺われる。

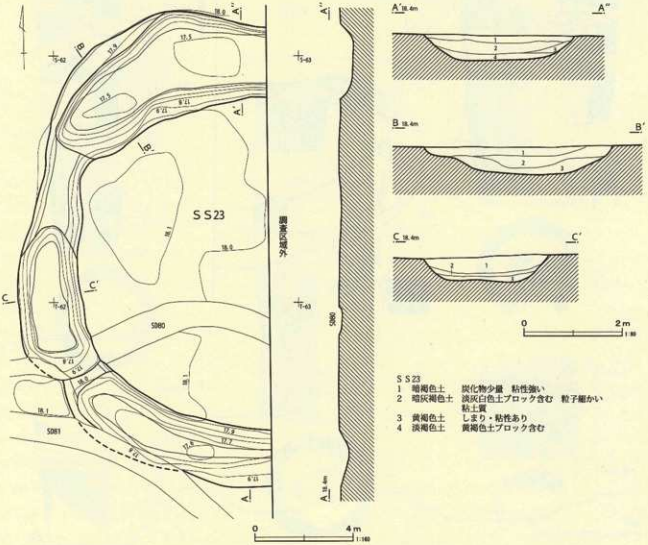
鉄滓（第543図）　6は埦形滓である。周溝の覆土中から出土した。古墳に伴う遺物であるかどうかは不明である。

時期　第22号墳の築造時期は、出土した遺物の特徴から、第24号墳に後出する6世紀前半の新しい段階に位置づけておきたい。

第23号墳（第546・547図）

第23号墳は調査区中央東端の壁沿い、S・T－62グリッドを中心に位置する。東半分は調査区域外に延びているため、今回調査したのは全体の約2分の1である。北西側に第21号墳、西側に第20号墳、南側に第26号墳が近接する。なお、北側には約35m離れて第25号墳が所在するまで古墳のない空閑地が広がっている。

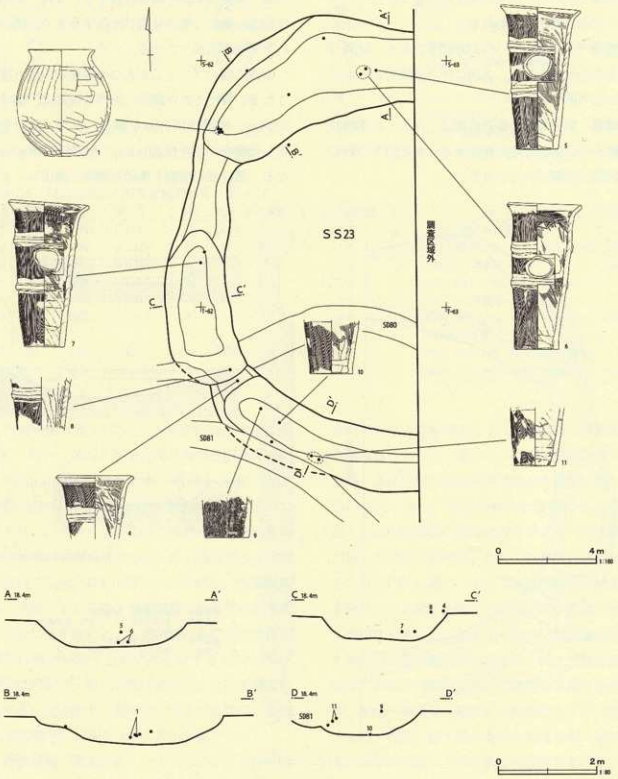
南西に向くブリッジをもつ中規模の円墳と推定される。検出された範囲における規模は、墳丘径13.34m、周溝径18.79mを測る。また、全形を推定した場合の墳丘径約14.8m、周溝径約20.40mとなる。墳丘部の南側を第80号溝跡が横切り、さら



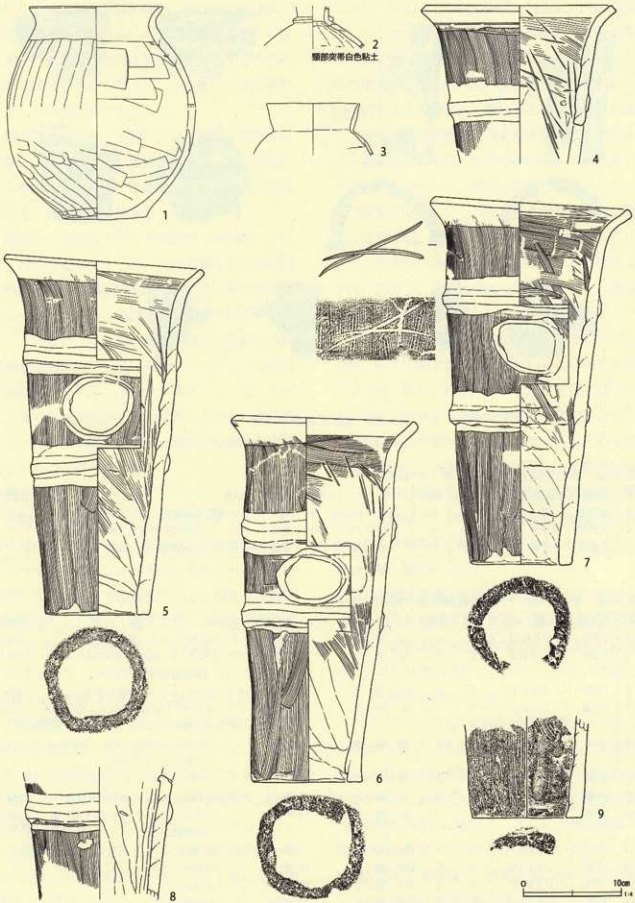
第546図　第23号墳（1）

に南側周溝外縁部を第81号溝によって壊されていた。

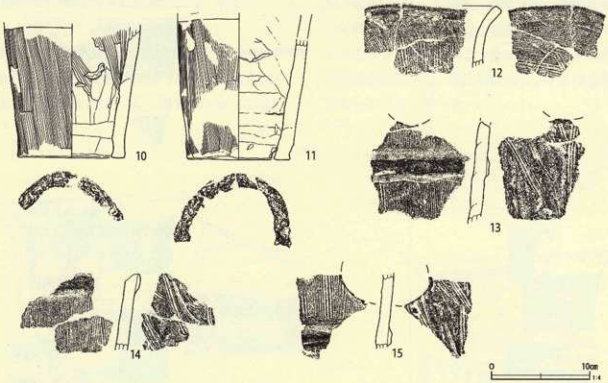
墳丘部の平面形態は、比較的整った円形を呈するものと推定される。周溝は、南側に比べ北側が幅広く掘り込まれている。周溝幅2.38～3.84 m、深さ0.36～0.54 m を測る。周溝底面は西側周溝部分が浅く、全体としては土壙状に一段深く掘り込まれた部分が連接するような状態であった。断面形は逆台形を呈し、墳丘側の立ち上がり角度がやや緩やかになっている。



第547図　第23号墳（2）



第548図　第23号墳出土遺物（1）



第549図　第23号墳出土遺物（2）

第202表　第23号墳出土遺物観察表（第548図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	残存	焼成	色調	備　　考	図版
1	土師器	甕	13.4	21.8	8.6	AHIK	70	不良	にぶい黄橙	器面磨耗　№13・16	179-8
2	土師器	細頸壺	—	4.4	—	AEHIJK	40	普通	橙	頸部突帯白色粘土使用　№18	
3	土師器	小型壺	9.5	5.3	—	EHIJK	30	普通	橙	器面磨耗　R・S62G	

第203表　第23号墳出土円筒埴輪観察表（第548・549図）

番号	器　種	胎　土	焼成	色調	残存	外面調整　本/2cm	内面調整　本/2cm	備　　考	図版
4	円筒	DEHIJ	B	C	50	縦ハケ　12	横ハケ・ナデ　14	T62G　№3　透孔一部残存	190-5
5	円筒	DEHI	B	D	80	縦ハケ　12	横・斜ハケ・ナデ　10	№8・9　S62G　基部R接合 基部幅3.5cm	190-1
6	円筒	DEHI	A	D	90	縦ハケ　12	横・斜ハケ・ナデ　12	№7・9・10　基部R接合	190-2
7	円筒	DEHI	A	D	90	縦ハケ　12	横・斜ハケ・ナデ　14	№18　口縁部外面「×」ヘラ描き 基部幅6.3cm	190-3・4
8	円筒	DEHIJ	B	B	40	縦ハケ　14	ナデ	№2・3　T62G　透孔一部残存 突帯にモミ圧痕あり	191-1
9	円筒	CEHIK	A	B	30	縦ハケ　12	ナデ・縦ハケ　9	T62G　№4	
10	円筒	DEHIJ	B	G	40	縦ハケ　14	斜ハケ・ナデ　8	T62G　№5　内面粘土屑付着	191-2
11	円筒	DEHI	B	D	55	縦ハケ　14	ナデ	T62G　№1・7　内面粘土屑付着 基部幅3.2cm	191-3
12	円筒	EHI	B	B	破片	縦ハケ　10	斜ハケ　13	S62G	
13	円筒	DEHIK	A	B	破片	縦ハケ　10	斜ハケ　10	T62G　№3	
14	円筒	CEHIK	A	B	破片	縦ハケ　11	斜ハケ　8	S62G	
15	円筒	DEHIK	A	B	破片	縦ハケ　12	斜ハケ　8	T62G	

ブリッジは南西方向を向き、開口部の幅は狭く、馬の背状を呈している。主軸方位はN－125°－Wを示す。その開口方向は第20号墳と第26号墳との間の空閑地を指向しており、「墓道」の存在を想定することが容易である。

周溝覆土は大きく4層に区分される。周溝底面を覆うように最下層には淡褐色土もしくは黄褐色土が堆積し、その上には暗灰褐色土と褐色土が堆積する。概ね自然堆積を示している。

遺物は、周溝覆土から土師器甕・細頸壺・小型壺、円筒埴輪が出土した。土師器甕は北西側周溝の外縁部寄りの周溝底面から少し浮いた状態で出土している。また、円筒埴輪は周溝の各所から出土しているが、とりわけ北側周溝から完形の円筒埴輪が2個体出土しているほか、ブリッジの両脇に全形の分かるような個体が集中していた。それらの多くは周溝底面に近い位置から出土していることから、古墳築造後の早い段階に周溝の中に転落したものと考えられる。

出土遺物

土器（第548図）　1は土師器の甕である。胴部中位に最大径をもつ小型品で、口縁部は緩やかに外反する。古墳に伴う遺物と考えられる。2は頸部に突帯を巡らす細頸壺である。橙色を基調とする素地粘土とは別に頸部突帯には白色粘土を使用している。3は小型壺で、口縁部は「く」の字に立ち上がり、口唇部は尖る。2・3は古墳時代前期の五領式期の所産で、古墳には伴わない。

円筒埴輪（第548・549図）　円筒埴輪の完存率が良好な割には、出土量はさほど多くない。築造時における限定的な樹立を想定することもあながち無理ではない。また、出土した埴輪の中には形象埴輪の破片がまったく含まれていなかった。

円筒埴輪は、いずれも2条突帯3段構成品と考えられる。全体の形の分かる5～7を基にした法量は、口径19.3～20.6cm、器高36.7～37.5cm、底径10.3～11.3cmを測る。また各段の長さは、第1段長14.5～16.8cm、第2段長8.7～11.6cm、口縁部長10.1～11.8cmを測る。第1段の器高に占める比率は、40.1～45.0%と伸長化が進行していることが読み取れる。外面調整は一次縦ハケのみである。内面調整はナデ調整後、横ハケないし斜ハケを施す。突帯は断面が低平なM字形を呈するものが多い。透孔は円形を基本とするが、中には横長のやや歪んだものがある。基部はR接合が多い。7のみ口縁部外面に「×」のヘラ描きが見られる。胎土には角閃石、石英、凝灰岩等の鉱物の混入が目立ち、特徴的に白色針状物質が混入する。焼成は全体に良好で、色調は淡褐色を基調とし、赤褐色のものを含む。

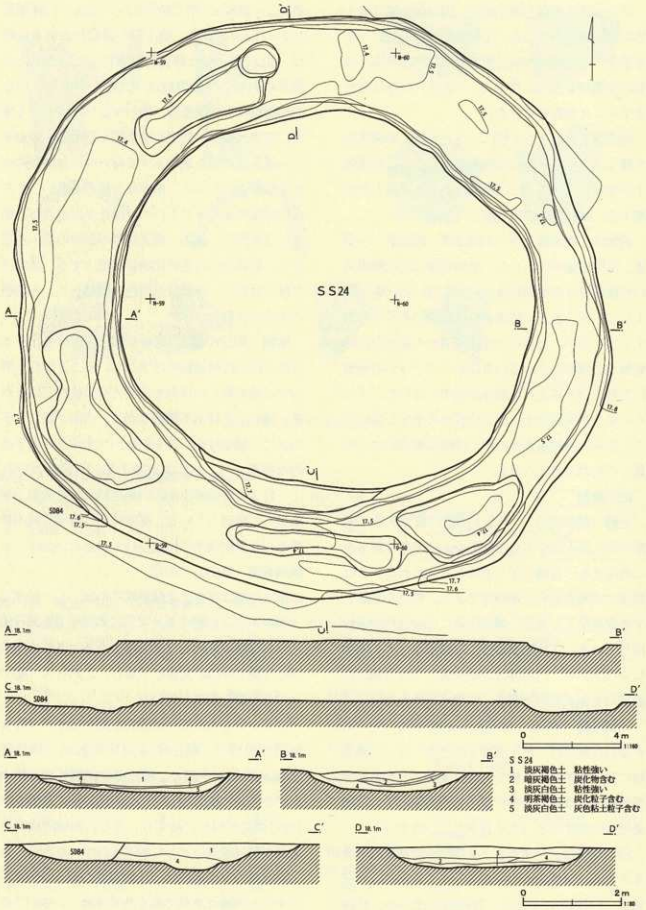
時期　第23号墳は、細身で第1段が伸長化した2条3段の円筒埴輪が出土していることから、群内では最も新しい様相を示す古墳に位置づけられる。特に、下稜が不明瞭な突帯、内面が雑なナデの後に口縁部付近のみを斜めハケするなどの手法的な特徴から、桜山窯跡群の第12号窯跡及びH1・H3号住居跡出土の円筒埴輪（城倉分類：F類型）に酷似している。築造時期は円筒埴輪の特徴から6世紀後半に位置づけておきたい。

第24号墳（第550・551図）

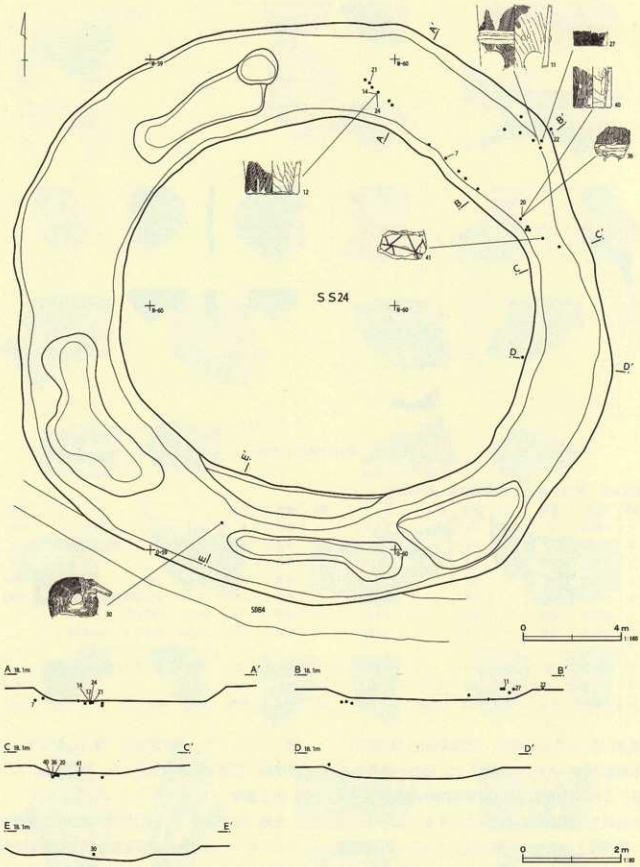
第24号墳は調査区北側西寄りのM・N－59グリッドを中心に位置する。東側に隣接する第25号墳とともに群の北限をなす古墳である。さらに南東側には第22号墳が近接しており、これらの3基で一つの小群を形成している。

ブリッジをもたない周溝の全周するタイプの大規模な円墳で、墳丘径16.84×16.20m、周溝径24.04×23.40mを測る。墳丘部の南側外縁は地山をテラス状に削り出していた。墳丘部の北側を第100号溝跡が斜めに横切り、さらに南側周溝の外縁部が第84号溝によって削平されていた。

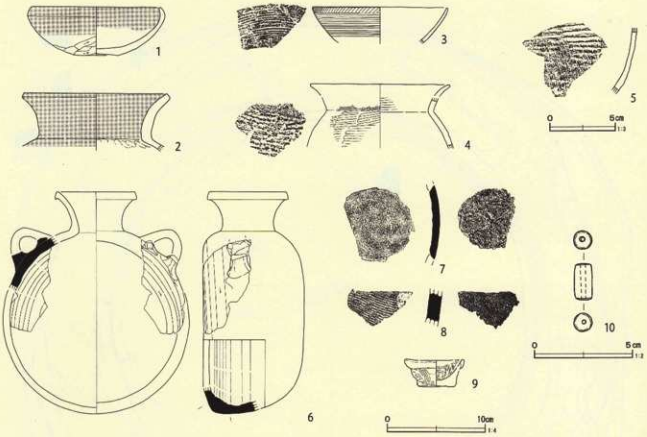
墳丘部の平面形態は、比較的形の整った円形を呈する。周溝は東側で幅を若干狭めているが、それ以外は幅広く均一に巡る。周溝幅3.12～4.60m、



第550図 第24号墳（1）



第551図　第24号墳（2）



第552図　第24号墳出土遺物（1）

第204表　第24号墳出土遺物観察表（第552図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	残存	焼成	色調	備　　考	図版
1	土師器	坏	(13.2)	4.9	(4.4)	CEGHI	40	良好	にぶい橙	赤彩　N60G	180-1
2	土師器	壺	14.7	5.8	－	CEHI	55	普通	灰白	赤彩　N60G	
3	土師器	高坏	(13.8)	3.7	－	EHIK	25	普通	にぶい橙	M59G	
4	土師器	甕	－	5.2	－	EHIJK	10	普通	灰褐	叩き甕　N58G	180-2
5	土師器	甕	－	5.0	－	EHIJK	5	普通	にぶい橙	外面ハケメ後叩き調整　N58G	180-3
6	須恵器	提瓶	－	9.5	－	EIK	10	良好	灰	M60G　外面降灰	
7	須恵器	提瓶	－	7.4	－	EIK	5	良好	灰白	在地産　外面ナデ　内面指頭 圧痕顕著　No.10　M60G	
8	須恵器	甕	－	3.8	－	EIK	5	良好	灰	外面平行叩き目　内面ナデ　M60G	
9	土師器	ミニチュア	(5.8)	2.8	3.7	CEHI	70	良好	灰白	N60G	180-4
10	土製品	管玉	長さ1.8	径0.9	孔径0.3	CEHI	100	普通	明褐	M60G　両面穿孔	180-5

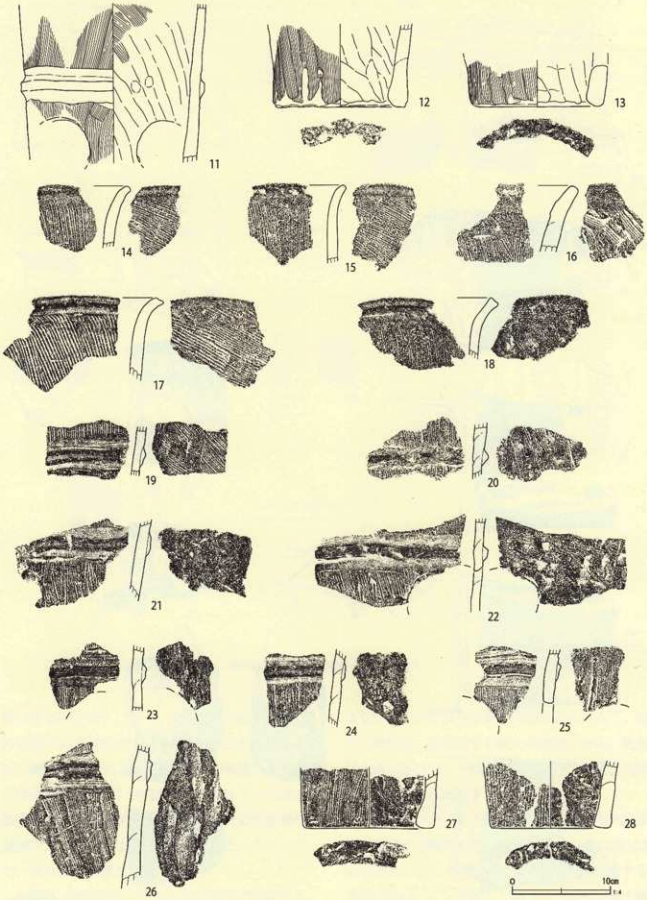
深さ0.40～0.42mを測る。周溝底面には数箇所に不整形の浅い落ち込みが見られ、凹凸が顕著である。これらの落ち込みは周溝掘削時の掘り方と考えられる。断面形は逆台形を呈する。

周溝覆土は大きく5層に区分される。周溝底面は、淡灰白色土ないし明茶褐色土に被覆されていた。概ね自然堆積を示す。

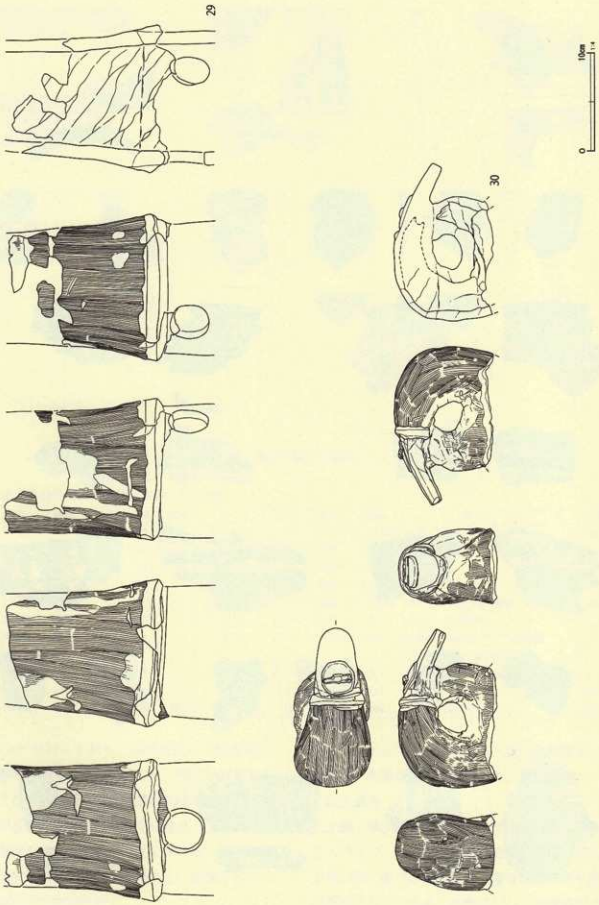
遺物は、周溝覆土から土師器坏・壺・高坏・甕・ミニチュア、須恵器提瓶・甕、土製管玉、円筒埴輪、形象埴輪等が出土した。

出土遺物

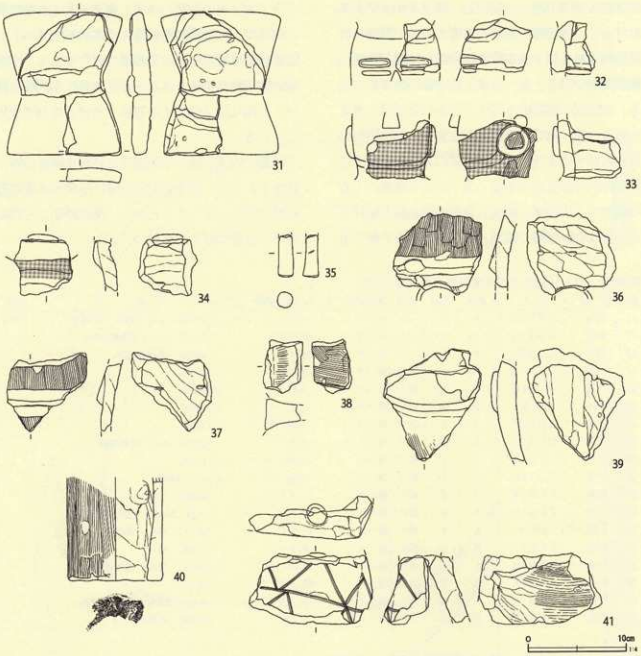
土器（第552図）　1は内湾口縁の小さな平底をもつ坏で、内外面に赤彩を施す。2は赤彩を施す単口縁の壺である。3は口縁部に横線文を施し、口唇部にキザミをもつ東海系パレス文様高坏の模倣品である。4・5は近江系の叩き甕で、胴部に



第553図　第24号墳出土遺物（2）



第554図　第24号墳出土遺物（3）



第555図　第24号墳出土遺物（4）

粗い叩き目を施す。6・7は須恵器提瓶で、胎土の特徴から東海地方からの搬入品と考えられる。同一個体であろう。6は環状把手が剥離し、外面に降灰がかかる。7は閉塞円板の破片で、内面に指頭圧痕が顕著に残る。8は在地産の須恵器甕の胴部片である。9は平底の埦形をしたミニチュアで、折り返し口縁である。

土製品（第552図）　10は小型の管玉で完存する。

円筒埴輪（第553図）　全体の形の分かる個体はないが、いずれも2条3段構成品であろう。胎土は角閃石、赤色粒子の混入が顕著である。焼成は全体に良好で、一部須恵質を含む。色調は淡褐色、橙褐色を基調とする。

形象埴輪（第554・555図）　29は半身像人物埴輪の胴部から裾部にかけての破片で、残存高16.8㎝を測る。30は鞆形埴輪で、器台部を欠損する。外面に粗いハケメを施し、鞆手には円形の粘土板の上に粘土紐を貼付した留具表現がある。鞆の大

きさは、長さ16.2cm、幅7.8cm、高さ10.0cmである。31は女子人物埴輪の板状台形髷である。外面には元結紐を粘土紐で表現する。内面には円形の頭頂部剥落痕が残る。32～34は人物埴輪の顔部片である。32は髷の剥落痕を残すことから女子像と考えられる。33・34は外面に赤彩を施す。33は円形の耳孔に接するようにドーナツ状の耳環を貼付する。35は棒状の美豆良である。36・37は半身像の上衣の裾部で、円筒部に断面三角形の粘土紐を貼付する。38は盾形埴輪の鰭部、もしくは馬の立髪であろう。39は馬の胸繋の革帯と考えられる。40は馬の脚部で、切開再接合技法による成形である。41は寄棟造り家形埴輪の屋根部の破片である。堅魚木の剥落痕は明確ではないが、頂部に小円孔を開け、外面には2段以上の連続三角文を線刻で表現している。

時期　内湾口縁の土師器坏は銭塚Ⅲ期新段階に比定されるが、ＭＴ15型式以降に出現する須恵器提瓶が出土していることから、築造時期は6世紀前半に位置づけておきたい。

第205表　第24号墳出土円筒埴輪観察表（第553図）

番号	器種	胎土	焼成	色調	残存	外面調整 本/2cm	内面調整 本/2cm	備考	図版
11	円筒	DEHIK	A	D	40	縦ハケ 14	斜ハケ・ナデ 14	M60G №17 透孔一部残存	191-4
12	円筒	CDEHI	A	D	25	縦ハケ 12	ナデ	M59G №4 基部幅5.0cm	
13	円筒	CDEHI	B	C	55	縦ハケ 14	ナデ	M60G 基部幅4.2cm	
14	円筒	CEHIK	B	C	破片	縦ハケ 9	斜ハケ 10	M59G	
15	円筒	CEHI	B	C	破片	縦ハケ 9	斜ハケ 10	M60G	
16	円筒	DEHI	B	D	破片	縦ハケ 11	斜ハケ 10	M60G	
17	円筒	CEHIK	A	C	破片	縦ハケ 7	斜ハケ 7	SJ259	
18	円筒	DEHIK	B	D	破片	縦ハケ 13	斜ハケ	M59G №4 器面磨耗	
19	円筒	CEHIK	A	C	破片	縦ハケ 9	斜ハケ 10	H60G	
20	円筒	EHIJK	A'	D	破片	縦ハケ 11	縦ハケ 11	№6 M60G	
21	円筒	CEHIK	B	D	破片	縦ハケ 11	ナデ	M59G №2	
22	円筒	CEHIK	A	E	破片	縦ハケ 10	ナデ	№18 M60G 透孔一部残存	
23	円筒	EHIJ	A'	F	破片	縦ハケ 12	ナデ	M60G 透孔一部残存	
24	円筒	CEHIK	B	D	破片	縦ハケ 8	ナデ	M59G №4	
25	円筒	CEHIK	A'	C	破片	縦ハケ 14	縦ハケ 13	H60G 透孔一部残存	
26	円筒	CEHIK	B	C	破片	縦ハケ 13	ナデ	M59G	
27	円筒	CEHIK	A	B	25	縦ハケ 9	ナデ	№16 M60G 基部幅4.7cm	
28	円筒	CEHIK	B	B	25	縦ハケ 8	ナデ	M60G 基部幅4.7cm	

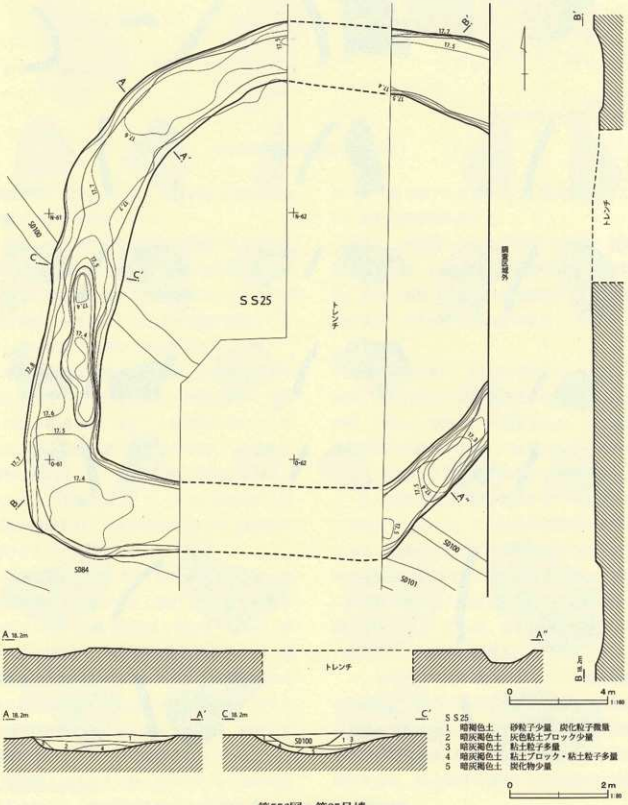
第206表　第24号墳出土形象埴輪観察表（第554・555図）

番号	器種	胎土	焼成	色調	外面調整 本/2cm	内面調整 本/2cm	備考	図版
29	人物　胴部	DEHI	A	E	縦ハケ 11	ナデ	N59G	200-4
30	靫	CDEHI	A	B	ハケメ 12	ナデ	№1(N59G)	200-5
31	人物　髷	EHIK	A	E	ナデ	ナデ	N59G 板状台形髷	201-1
32	人物　顔部	CEHI	B	E	ナデ	ナデ	SJ259 女子か	
33	人物　顔部	CEHI	B	E	ナデ	ナデ	N59G 赤彩痕	201-2
34	人物　顔部	CEHI	B	E	ナデ	ナデ	M59G 赤彩痕	
35	人物　美豆良	EHIK	B	E	ナデ	―	崩溝	
36	人物　裾部	EHIK	A	D	縦ハケ・ナデ 10	ナデ	№6 M60G	
37	人物　裾部	CEHI	A	D	縦ハケ 10	ナデ	SJ259	
38	盾　鰭部	DEHIK	B	C	ハケメ 10	ハケメ 11	M59G	
39	馬　胸部	CEHI	A	C	ナデ・ハケメ	ナデ	N59G 胸繋の破片	
40	馬　脚部	DEHI	B	E	縦ハケ 8	ナデ	M60G №6 切開再接合	
41	家　屋根部	CEHI	A	E	ナデ	横ハケ・ナデ 9	№2 M60G 外面連続三角文線刻 頂部小円孔	201-3

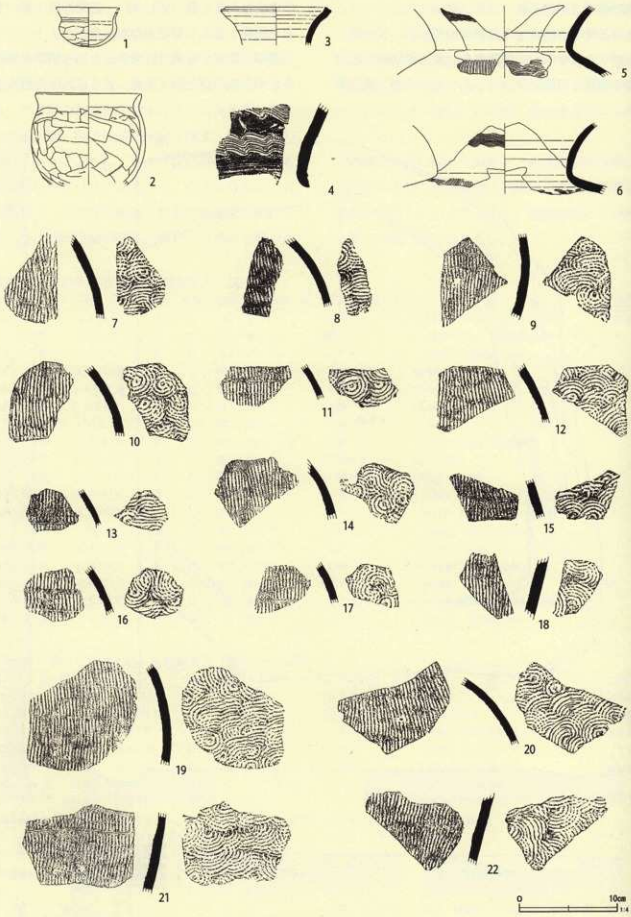
第25号墳（第556図）

第25号墳は調査区北側東端の壁沿い、N－61・62グリッドを中心に位置する。表土掘削時に旧流路の確認を目的に深掘りしたトレンチが、墳丘部の中央を大きく貫いてしまい、結果的に古墳の全容を把握することができなかった。

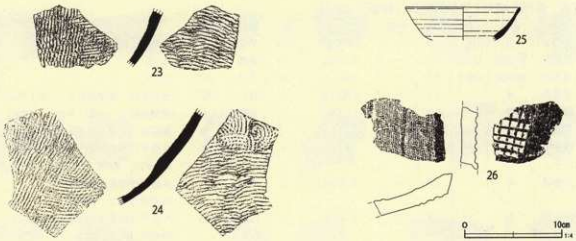
西側に隣接する第24号墳とともに古墳群の北限をなす古墳のひとつである。さらに、南西側には



第556図　第25号墳



第557図　第25号墳出土遺物（1）



第558図　第25号墳出土遺物（2）

第22号墳が近接し、これら3基は他の古墳とはやや離れて小群を形成している。

調査した古墳の中では比較的規模の大きな円墳で、墳丘径18.12×16.00m、周溝径25.72×20.72mを測る。墳丘部南側から南側周溝にかけて中・近世の溝跡である第84・100・101号溝が重複しており、墳丘部及び周溝の一部が削平されていた。

墳丘部の平面形態は、南西側と北東側に大きく張り出した不整円形を呈する。西側周溝が、西隣りの第24号墳を避けるように直線的に延びているため、墳丘部南西側に隅角を作り出し、方墳的な様相を窺わせるが、一応、円墳と判断しておきたい。また、南側周溝はトレンチによる削平のため大半が破壊されてしまい明確でないが、直線的に延びるものと推定される。

周溝は総じて幅広で浅く巡らされているが、南東側周溝だけは幅を大きく狭め、やや深く掘り込まれていた。周溝の規模は、幅1.84～4.00m、深さ0.30～0.52mで、断面形は逆台形を呈する。周溝底面は概ね平坦である。ただし、西側周溝の一角に浅い不整形の落ち込みが認められた。おそらく周溝掘削時の掘り方であろう。なお、調査した範囲においてブリッジは確認されなかった。

周溝覆土は大きく5層に区分される。暗灰褐色土を主体とし、西側周溝を中心に最下層に粘土ブロック・粘土粒子を多量に含む土層が堆積していた。概ね自然堆積を示す。

遺物は、周溝覆土から土師器坩・小型甕、須恵器長頸瓶・甕、円筒埴輪・形象埴輪が出土したほか、古墳の周溝に廃棄された須恵器坏・甕、平瓦等の奈良・平安時代の遺物が含まれていた。

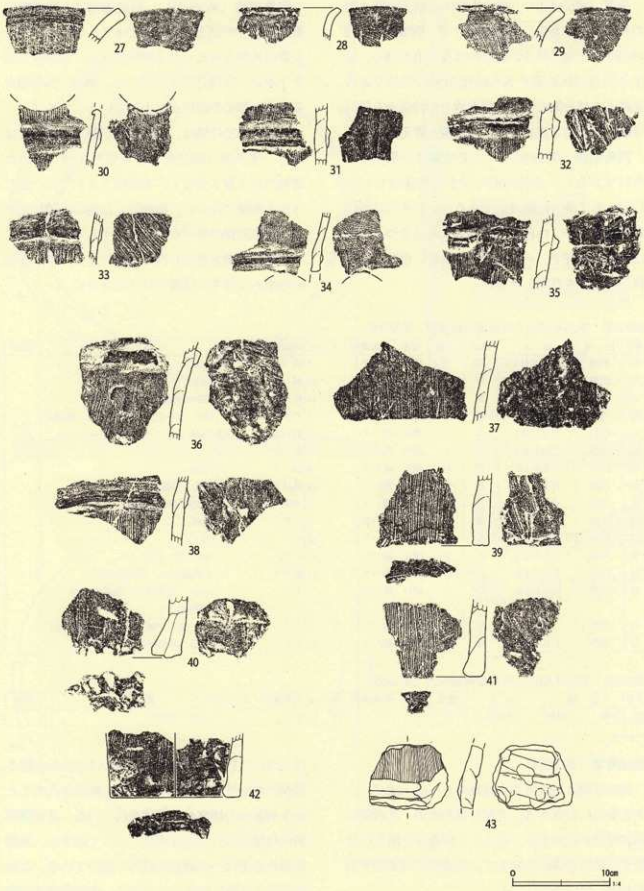
出土遺物

土器（第557図）　1は広口の坩で、口唇部を欠損する。底部は小さな平底である。2は口縁部が短く外反し、球形胴の小型甕である。3は須恵器長頸瓶の口縁部である。口縁部は断面三角形を呈し、口唇部を上方に短く摘み出した特徴をもつ。5・6は須恵器甕の口縁部の破片で、口縁部外面に波状文を施文する。7～24は須恵器甕の胴部片である。外面に平行叩き目の後、横位の指ナデや沈線を施文する。内面には青海波文が残る。外面には降灰や銀化した部分が見られる。周溝各所の覆土中から出土している。おそらく埋葬儀礼に伴い破砕され、周溝内に廃棄されたのであろう。

4・25は平安時代の遺物である。4は須恵器甕の口縁部で、外面に波状文を施す。胎土に白色針状物質を含んだ南比企産の製品である。25の須恵器坏は口径11.8cmに復元される。胎土に白色針状物質を含み、鳩山編年HⅧ期の9世紀後半に位置づけられる。

第207表　第25号墳出土遺物観察表（第557・558図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	残存	焼成	色調	備　　考	図版
1	土師器	坩	－	3.6	－	CEGHI	95	不良	灰白	赤彩痕　内面黒斑　M62G	180-6
2	土師器	小型甕	(10.8)	9.3	－	EGHJ	40	普通	にぶい橙	N61G	
3	須恵器	長頸瓶	(10.2)	3.9	－	EGIK	25	良好	灰白	O62G	
4	須恵器	甕	－	8.4	－	EHIJK	5	良好	褐灰	南比企産　櫛描波状文（9条1単位）	
5	須恵器	甕	－	7.4	－	EIK	15	良好	灰	櫛描波状文（12条1単位）　P62G	
6	須恵器	甕	－	7.3	－	EIK	15	良好	灰	櫛描波状文（9条1単位）　P62G	
7	須恵器	甕	－	8.5	－	HIK	5	良好	灰	外面平行叩き目後ナデ　内面同心円文　降灰　P62G	
8	須恵器	甕	－	7.0	－	EHIK	5	良好	灰	外面平行叩き目後沈線　内面同心円文　P62G	
9	須恵器	甕	－	8.8	－	EHIK	5	良好	灰	外面平行叩き目後沈線　内面同心円文　M62G	
10	須恵器	甕	－	7.1	－	EHIK	5	良好	灰	外面平行叩き目後沈線　内面同心円文　P62G	
11	須恵器	甕	－	3.5	－	EHIK	5	普通	灰	外面平行叩き目後ナデ　内面同心円文　P62G	
12	須恵器	甕	－	6.0	－	EHIK	5	良好	灰	外面平行叩き目後ナデ　内面同心円文　降灰　P62G	
13	須恵器	甕	－	3.8	－	CEHIK	5	良好	灰	外面平行叩き目　内面同心円文　降灰　P62G	
14	須恵器	甕	－	6.2	－	EHIK	5	良好	灰	外面平行叩き目後ナデ　内面同心円文　P62G	
15	須恵器	甕	－	4.0	－	EHIK	5	普通	灰	外面平行叩き目　内面同心円文　降灰　P62G	
16	須恵器	甕	－	5.0	－	EHIK	5	良好	灰	外面平行叩き目後ナデ　内面同心円文　降灰　M62G	
17	須恵器	甕	－	4.2	－	EHIK	5	良好	灰	外面平行叩き目後ナデ　内面同心円文　降灰　P62G	
18	須恵器	甕	－	6.5	－	EHIK	5	良好	灰	外面平行叩き目後ナデ　内面同心円文　P62G	
19	須恵器	甕	－	13.0	－	EHIK	5	良好	灰	外面平行叩き目後沈線　内面同心円文　降灰　P62G	
20	須恵器	甕	－	6.7	－	EHIK	5	良好	灰	外面平行叩き目　内面同心円文　降灰　P62G	
21	須恵器	甕	－	8.2	－	EHIK	5	良好	灰	外面平行叩き目後沈線　内面同心円文　P62G	
22	須恵器	甕	－	7.7	－	EHIK	5	良好	灰	外面平行叩き目後ナデ　内面同心円文　P62G	
23	須恵器	甕	－	5.9	－	EHIK	5	良好	灰	外面平行叩き目　内面同心円文　P62G	
24	須恵器	甕	－	9.9	－	EHIK	5	良好	灰	外面平行叩き目　内面同心円文　P62G	
25	須恵器	坏	(11.8)	3.4	－	DIJK	25	良好	灰	南比企産　P62G	
26	瓦	平瓦	長さ6.4	幅8.2	厚さ1.7	EHIJ	5	良好	青灰	凸面正格子叩き　凹面布目　模骨痕有り	



第559図　第25号墳出土遺物（3）

平瓦（第559図）　26は凸面に正格子の叩き痕の残る平瓦である。桶巻き造りで、側端面は2段の面取りが施される。凹面には布目痕が残る。胎土に白色針状物質を含む南比企産の製品である。正格子の部分的な叩きや桶巻造りの特徴から国分寺創建以前の8世紀前半代の所産と考えられる。

円筒埴輪（第559図）　円筒埴輪は少量出土したにすぎない。全体の形の分かる個体はないが、いずれも2条3段構成品であろう。胎土には角閃石、赤色粒子、白色粒子等の混入が目立つ。焼成は全体に良好で、一部須恵質を含む。色調は淡褐色、橙褐色を基調とする。

形象埴輪（第559図）　形象埴輪は人物埴輪の裾部の破片が出土したのみである。43は半身像の上衣の裾部と考えられる破片である。須恵質に焼き上がり、灰褐色を呈している。第22・24号墳からも同じ部位の破片が出土している。

時期　第25号墳は、墳丘形態が整った円形ではなく、南西側に隅角をもつ不整形を呈していた。埴輪の出土量も少なく、本来樹立されていたかどうかも明確ではない。特徴的には他の古墳に比べて、須恵器甕の破片が数多く出土している。ここでは築造時期を推定し得る根拠に乏しいが、6世紀中頃から後半に位置づけておきたい。

第208表　第25号墳出土円筒埴輪観察表（第559図）

番号	器種	胎土	焼成	色調	残存	外面調整 本/2cm	内面調整 本/2cm	備考	図版
27	朝顔	CDEHI	B	C	破片	縦ハケ 8	斜ハケ 8	O60G	
28	円筒	DEHIK	B	D	破片	縦ハケ 10	斜ハケ 10	N61G	
29	円筒	CDEHI	A'	F	破片	縦ハケ 14	斜ハケ 11	L59～O62G	
30	円筒	CEHIK	A'	F	破片	縦ハケ 10	ナデ	N59・60～P59・60G　透孔一部残存	
31	円筒	CDEHI	A	C	破片	縦ハケ 12	縦ハケ 12	N61G	
32	円筒	CDEHI	A'	C	破片	縦ハケ 10	縦ハケ 11		
33	円筒	CEHIK	C	D	破片	縦ハケ 8	斜ハケ 9	N61G	
34	円筒	DEHIK	B	D	破片	縦ハケ 14	横ハケ・斜ハケ 16	透孔一部残存	
35	円筒	CEHIK	B	D	破片	縦ハケ 9	ナデ	内面粘土紐痕顕著	
36	円筒	CDEHI	B	E	破片	縦ハケ 9	ナデ	O60G	
37	円筒	CEHIK	A	C	破片	縦ハケ 10	ナデ	O61G	
38	円筒	CEHIK	A'	F	破片	縦ハケ 11	ナデ	N59・60～P59・60G	
39	円筒	CEHIK	A'	F	破片	縦ハケ 11	縦ハケ 11	基部幅5.0cm　底面紐状圧痕	
40	円筒	CEHIK	C	D	破片	縦ハケ	ナデ	N61G　器面磨耗　基部R接合 基部幅4.7cm	
41	円筒	EHI	A'	F	破片	縦ハケ 11	ナデ	N59・60～P59・60G　基部幅4.2cm	
42	円筒	CEHIK	A	D	30	縦ハケ 10	ナデ	P62G　基部幅4.2cm	

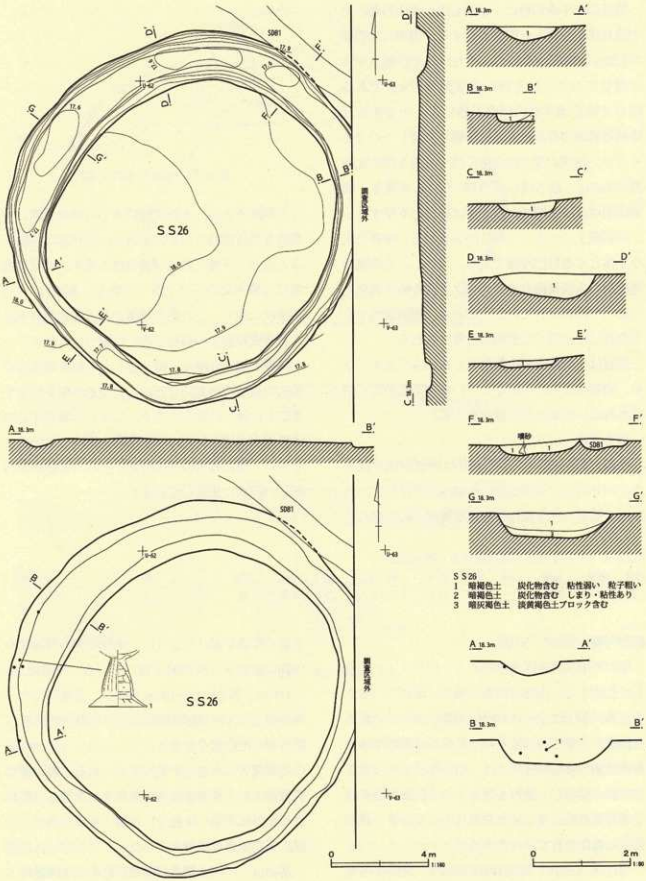
第209表　第25号墳出土形象埴輪観察表（第559図）

番号	器種		胎土	焼成	色調	外面調整 本/2cm	内面調整 本/2cm	備考	図版
43	人物	裾部	DEHI	A'	F	ハケメ・ナデ 10	ナデ	O60G　須恵質	

第26号墳（第560図）

第26号墳は調査区中央南東のU－61・62グリッドを中心に位置する。北側に第23号墳、北西側に第20号墳が近接する。さらに、調査区を南北に分断する第83号溝跡を隔てて、南東側には第28号墳が対峙している。

周溝の全周するタイプの小規模な円墳で、墳丘径12.34×11.66m、周溝径14.91×14.18mを測る。南側の第83号溝跡が埋没した後に築造されたことが土層断面の観察から確認されている。北東側周溝の外縁部は、第81号溝跡によって壊され、東側周溝外縁部は一部調査区域外に延びている。なお、墳丘盛土は既に削平されており、内部主体等は確認されなかった。


SS26
SD01
A 16.3m
A'
B 16.3m
B'
C 16.3m
C'
D 16.3m
D'
E 16.3m
E'
F 16.3m
F'
G 16.3m
G'
噴砂
SS26
1 暗褐色土　炭化物含む　粘性弱い　粒子粗い
2 暗褐色土　炭化物含む　しまり・粘性あり
3 暗灰褐色土　淡黄褐色土ブロック含む
0
4m
1:100
0
2m
1:50

第560図　第26号墳

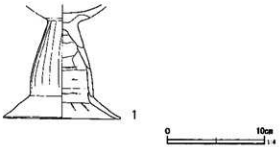
墳丘部の平面形態は、正円を描かず南西側にやや張り出した歪んだ円形を呈する。周溝は北西側で2.32mと幅広いものの、それ以外では幅を大きく減じており、最も狭い南東側で1.04mである。総じて墳丘南半部の周溝が狭いことからすると、第83号溝跡の存在が大きく影響を及ぼしたのであろうか。周溝の深さは全体に浅く、最も深い北西側で0.48m、最も浅い南西側で0.12mを測る。周溝底面はほぼ平坦で、断面形は逆台形を呈する。

周溝覆土は大きく3層に区分される。暗褐色土を主体とする自然堆積である。しかし、北西側周溝底面のみ淡黄褐色土ブロックを含む暗灰褐色土によって被覆されていることから、周溝掘削土を人為的に埋め戻した整地層と考えられる。

遺物は土師器片が少量出土したのみである。なお、埴輪はまったく出土していないことから、樹立されていなかったと推定される。

出土遺物

土器（第561図）　1の高坏は西側周溝外縁立ち上がり付近の周溝底面から24cmほど浮いて出土した。周溝の埋没過程における周囲からの流れ込みと判断される。五領式期終末から和泉式期に特徴的な屈折脚高坏の脚部である。柱状部は中膨らみとなり、坏部とのホゾ接合痕を残す。柱状部内面には横方向のヘラケズリを施し、裾部は「ハ」の字状に開く。これらの特徴から五領式期終末から和泉式期前半の銭塚Ⅱ期に位置づけられる。



第561図　第26号墳出土遺物

時期　第26号墳は、唯一出土した屈折脚高坏が混入の可能性が高いことから、築造時期を特定することは難しい状況にある。しかし、隣接する第20号墳が本墳とともに単位小群を構成していることから、第20号墳の築造時期に近い6世紀前半の新しい段階に比定しておきたい。

第210表　第26号墳出土遺物観察表（第561図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	残存	焼成	色調	備　考	図版
1	土師器	高坏	―	10.7	12.1	BCEHIJ	95	普通	橙	No.3	

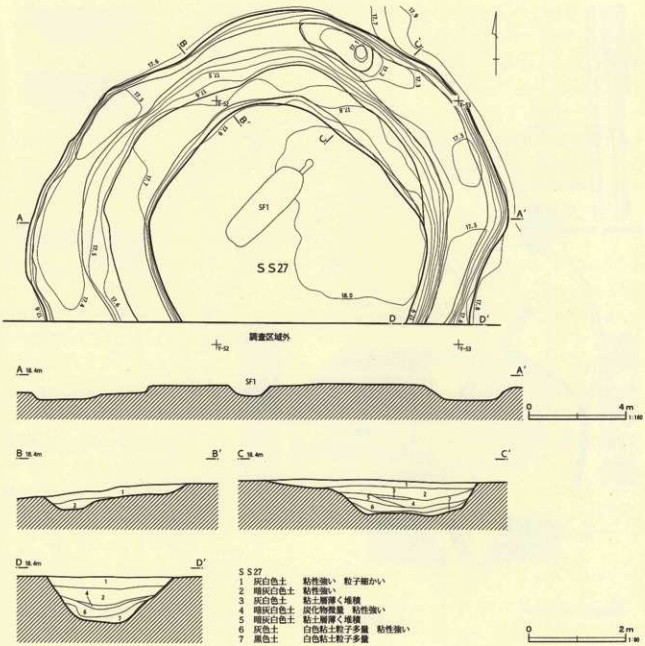
第27号墳（第562・563図）

第27号墳は調査区南西端のX－52グリッドを中心に位置する。南側が調査区域外に延びているため、今回調査したのは全体の約4分の3である。西側は、古墳群の西限を画する第79号溝跡に接し、東側は第17号墳が近接する。墳丘部の中央に第1号窯跡が重複し、それを壊している。南東側を除く墳丘部外縁には、地山を削り出したテラス状の施設が造作されていた。

墳丘径14.20m、周溝径20.00mの中規模の円墳である。墳丘部の平面形態は正円を描かず、不整円形を呈する。周溝の幅は均一ではなく、近接する第17号墳を避けるように、東側周溝の外縁部を内側に湾曲させ周溝幅を減じている。周溝幅2.64～4.90m、深さ0.20～0.94mを測り、北東部分の一角が最も深い。周溝底面にはやや凹凸が見られ、断面形は逆台形を呈する。

周溝覆土は大きく7層に区分される。最下層に白色粘土粒子を多量に含む黒色土が堆積し、これより上には下層に灰色土、中層に暗灰白色土、上層に灰白色土が堆積していた。

遺物は、不明木製品（第471図14）、土師器坏・甕・甑、須恵器甕、円筒埴輪等が出土し、周溝の数箇所に遺物のまとまりが見られた。



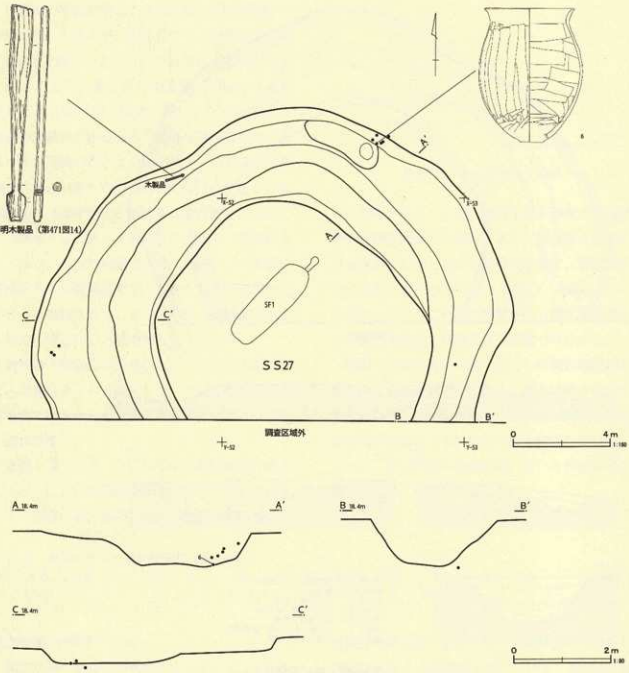
第562図　第27号墳（1）

不明木製品は北西側周溝の幅が狭まった箇所の周溝底面から僅かに浮いた状態で、頭部を東に向けた状態で出土した。出土当初は「木製樹物」の可能性も考えたが、未加工部分が多く、左右対称でないことから、現状では鋤ないし掘り棒等の未製品と位置づけておく。この他にも周溝覆土上層に木片の集中する箇所が見られた。

土器は北東側周溝外側立ち上がり部付近の底面から土師器甕６が破砕された状態で出土した。この他はいずれも覆土中からの出土である。ただし、９の須恵器甕は破片の一部が北側の第79号溝跡からも出土していることから、古墳祭祀に使用された後に、破砕され、古墳の周囲にばら撒かれた可能性も考えられる。円筒埴輪は総じて出土量が少ない。その大半が西側周溝から北西側周溝に相当するX－51・52グリッドから出土した。

出土遺物

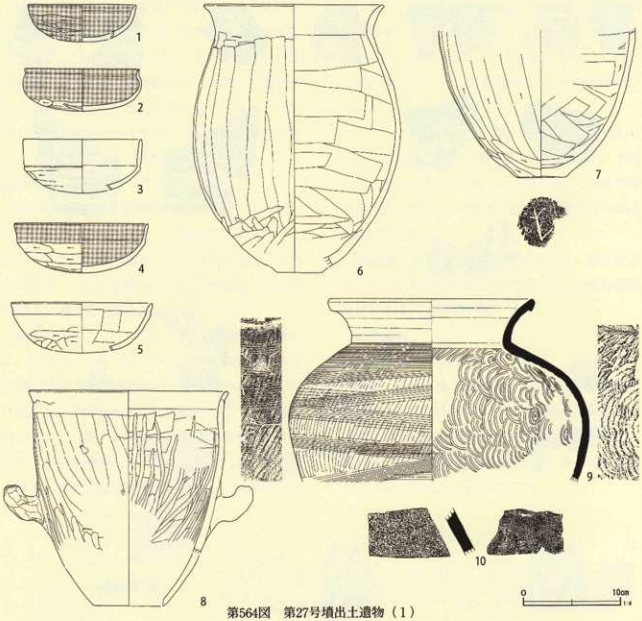
土器（第564図）　１～５は坏である。１は赤



第563図　第27号墳（2）

彩を施す半球形坏、2は口縁部がS字状に屈曲する比企型坏、3は坏蓋模倣坏、4は赤彩を施す口縁部と体部の境に弱い段をもつ外反口縁坏、5は深身の半球形坏である。6・7は胴部中位に最大径をもつ甕である。8は牛角状の把手をもつ大型甑である。9・10は須恵器の甕である。9は胴部外面に平行叩き目を施した後、螺旋状のカキ目を施す。内面には同心円文当て具痕が良く残る。

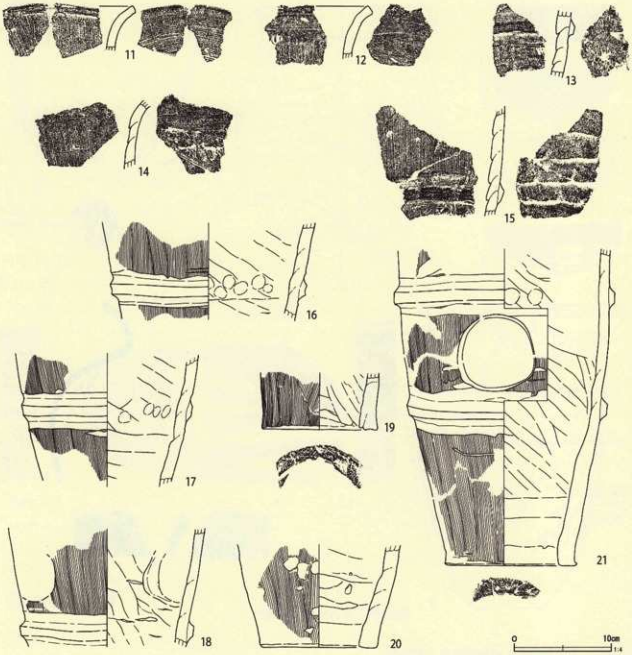
円筒埴輪（第565図）　円筒埴輪は少量出土した。全体の形の分かる個体はないが、いずれも2条3段構成品と考えられる。外面調整は一次縦ハケのみである。内面調整はナデ調整後、口縁部に横ハケないし斜ハケを施す。突帯は断面低台形である。21は口縁部を欠損する。法量は底径13.5cm、残存高32.6cm、第1段長15.9cm、第2段長11.5cmを測る。胎土は角閃石、赤色粒子、白色粒子等の混入が目立つ。焼成は全体に良好である。色調は淡褐色を基調としている。



第564図　第27号墳出土遺物（1）

第211表　第27号墳出土遺物観察表（第564図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	残存	焼成	色調	備　　考	図版
1	土師器	坏	(11.1)	3.5	—	DEHIJ	30	良好	灰黄褐	赤彩　W53G	
2	土師器	坏	(11.8)	4.4	—	DEHI	45	良好	にぶい黄橙	比企型坏　赤彩　X52G	180-7
3	土師器	坏	(12.2)	5.2	—	DEHIJ	25	普通	にぶい赤褐	模倣坏　W52G　№1	
4	土師器	坏	(13.8)	5.1	—	DEHIJ	40	普通	にぶい黄橙	赤彩　X52G	180-8
5	土師器	坏	(14.6)	4.9	—	DEHI	30	普通	にぶい褐	W52G　№1	
6	土師器	甕	(18.4)	27.0	—	DEHI	65	良好	橙	胴部外面煤付着　W57G　№1	180-9
7	土師器	甕	—	15.4	5.2	DEHI	60	良好	明褐	胴部外面煤付着　底部木葉痕 W52G　№1	
8	土師器	甑	(20.6)	16.6	—	DEHI	40	良好	にぶい黄橙	図上復元　X52G	
9	須恵器	甕	21.0	18.7	—	DEIJK	60	普通	灰	外面平行叩き目後カキ目　内面同心円文当て具痕　南比企産　W・X52G SD79	180-10
10	須恵器	甕	—	5.0	—	EHIK	5	良好	灰	外面平行叩き目　内面ナデ降灰 X51G	



第565図　第27号墳出土遺物（2）

第212表　第27号墳出土円筒埴輪観察表（第565図）

番号	器種	胎土	焼成	色調	残存	外面調整	本/2cm	内面調整	本/2cm	備考	図版
11	円筒	CEHIK	A	D	破片	縦ハケ	12	横ハケ	12	X51G	
12	円筒	EHIK	B	D	破片	縦ハケ	16	横ハケ	13	X52G	
13	円筒	CDEHI	A	C	破片	板ナデ		ナデ		W52G	
14	円筒	EHIK	A	D	破片	縦ハケ	18	横ハケ・斜ハケ	16	X51G	
15	円筒	CEHIK	A	D	破片	縦ハケ	18	ナデ		X51G　粘土紐痕明瞭	
16	円筒	DEHI	A	D	25	縦ハケ	15	ナデ		X51G	
17	円筒	DEHI	A	D	35	縦ハケ	17	ナデ		X51・52G	
18	円筒	DEHI	A	D	35	縦ハケ	17	ナデ		X51・52G　透孔一部残存	
19	円筒	CDEI	A'	D	45	縦ハケ	17	ナデ		X51G　基部R接合　基部幅4.9cm	191-5
20	円筒	DEHI	A'	D	10	縦ハケ	13	ナデ		X51G	
21	円筒	DEHI	A	E	60	縦ハケ	16	ナデ		SD79(W・X52G)	191-6

時期　第27号墳は、東隣りの第17号墳に後出して築造されたことは、本墳の周溝が第17号墳を避けていることから明白である。また、周溝からは木製品、甕・甑等の煮沸具など、特徴的な遺物が出土した。築造時期は、体部の扁平化した比企型坏と胴部に螺旋状のカキ目を施す須恵器甕の特徴から6世紀前半の新しい段階に比定される。

第28号墳（第566図）

第28号墳は調査区南側東端の壁沿い、W－62グリッドを中心に位置する。東側が調査区域外に延びているため、今回調査したのは全体の約2分の1である。南西側約5.5mに第13号墳が、北西側約8.0mに第26号墳が近接している。

南西に向くブリッジをもった小円墳と推定される。今回調査した古墳の中では最小規模で、墳丘径約6.40m、周溝径約9.60mと推定される。

墳丘部の平面形態は、比較的形の整った円形を呈するものと推定される。周溝をほぼ均一に巡らしている。周溝幅1.24～1.80m、深さ0.30～0.52mを測る。周溝底面は緩やかに起伏し、段差等の造作はない。周溝の掘り込みは、ブリッジ方向に向かって緩やかに傾斜し、深くなっている。周溝の断面形は、逆台形ないし浅い皿形を呈する。概して墳丘側の立ち上がりは急傾斜で、外側は緩やかである。

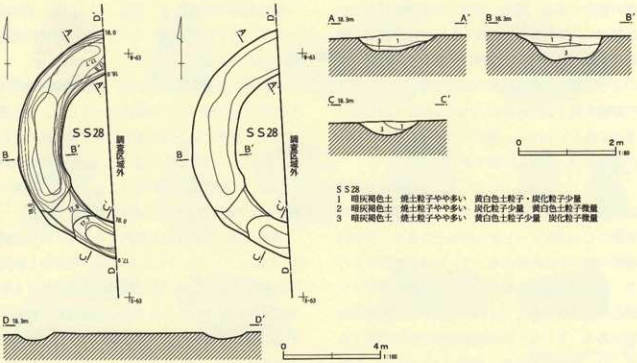
ブリッジは南西方向を向き、直線的に開口している。墳丘部より1段低く掘り窪めていた。主軸方位はN－138°－Wを示す。開口方向には第13号墳が位置しており、その存在を強く意識しての占地と推定される。

周溝覆土は大きく3層に区分される。焼土粒子をやや多く含む暗灰褐色土を主体とし、概ね自然堆積を示す。

出土遺物

遺物はまったく出土していない。

時期　古墳に伴う遺物がないため、築造時期については不明である。ただし、南西側に位置する第13号墳の存在を意識した従属墳的なあり方からすれば、第13号墳とほぼ同時期か、あるいは後出する段階の所産と考えられる。



第566図　第28号墳